
幻想組曲

之ち

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻想組曲

【Nコード】

N5091Y

【作者名】

之ち

【あらすじ】

夏の日のこと、明石海峡大橋にて連続飛び降り事件が発生。向かったのは一人の魔術師と一人の奏者。義足の奏者は荒れる海原で巨大な妖魔と対峙する。

第一章一話

七月が終わる頃、いつもの通り連絡もなしに唐突にその客人はやって来た。

大阪の天王寺駅より南下した阿倍野との中間に一区切りだけ人通りの少ない通りがある。その通りにはぎちぎちにマンションが並んでいるが無意識のうちに誰もが遠ざかっているようだった。内一棟、外装は綺麗で新築に見えるマンションの地下へ客人の車は姿を隠していく。ボンネットの中からドラムを叩くようなエンジン音が響いていたが車体と共に消えていく。今日も三十五度の猛暑日である。車を日の下に置く訳にはいかなかった。

彼女の車が入っていったのは真つ白の外壁が目を引くマンションの地下だった。新築のように見える白い外壁は今年の春、ようやく耐震強化を終えた改築時に塗り直されたもので周囲とは格が違うようにさえ見える。だが車の行き着いた先は地上とは別物だった。地下駐車場は地上からとは全く別の世界を作り上げている。耐震用に補填された鉄骨がそのまま見えている。まだ工事半分で放置されているようにさえ見えるのだ。そして増えた鉄骨のせいで車一台分停められなくなっている。特に六十年代のアメリカ製車両にはその身体を収納するにはきつい。

ハンドルをさばき起用に停める。エンジンを切って出てきたのはOL風の女。髪は襟元まで黒のスーツとよく合っている。助手席に置いていた茶色の紙袋を持って地上へと続く階段へと向かう。

「エレベーター欲しいわね」

ほんの僅かな時間でも額に汗がじんわりと滲む。昨今の天候というのは地獄のような猛暑となっている。太陽の下にいれば蒸し物になってしまうような暑さ。彼女も同じだ、黒いスーツにも汗が滲みだす。せっかくの新品なのにと肩がぐくりと落ちる。

彼女は目的の四階に着くとさらに奥へと向かって歩く。部屋の数

は少なく全ての階に三部屋となっている。その割になかは狭くワンルームである。ヒールがコンクリートを叩く音とセミの鳴き声だけが五月蠅く鳴っていた。薄暗く影になっている洞窟のような通路の最奥にたどり着くと間髪いれずに呼び鈴を鳴らす。そして一切の反応を待たずにドアを開けた。

まるで茶碗蒸しの蓋だった。ドアを開けた瞬間、これまでにないほどの熱風が彼女を溶かそうと噴出した。行き場を無くした熱風が吹き荒れたにすぎない。だが一息吸えば喉を焼こうとする風に息を飲むしかなかった。一旦顔を背けて息を整える。

「おはよう、悠」

現在、朝の十一時。すでにおはようと言う挨拶は相応しくない。挨拶の向こう側にあるのはフローリングが剥き出しになったワンルームの部屋。彼女の足元には靴が三足並んでいる。どれもロングブーツで黒色。気軽に出かけられるような靴はない。右手側のキッチンには新品同様で使っている感じはなかった。

「ちよつと聴こえてるの？」

少し大きめの声で部屋の奥に向かって言う。すると「聴こえてるよ」と関心無さそうな男の子の声が返ってくる。まだあどけなさが抜けておらず、いや幼さの抜けない女のように高い声をしていた。

四人も集まれば忽ち満員となるほどの部屋の奥に少年はいた。

部屋を速く歩いて一番に手にとったのはエアコンのリモコンだった。すぐに起動させると全開になっていた窓を閉める。どれだけ窓を開けていても風なんて吹いていないのだから関係ない。それでも少年は興味無さそうにしていた。

「笙子さん、鍵かけてないんだから勝手に入って来ればいいじゃないか」

壁には二本の人間の足を模した器具が並んでいる。床に腰を下ろして少年は愛用のギターに手を伸ばしていた。その少年、部屋の主である彼には脚がない。正確には膝から下が消滅している。壁にかけている義足がなければ立ち上がることは出来ない。笙子は義足を

一目見てから視線を落とす。少年、悠はギターの弦を張り替えている最中であつた。

「エアコン使いさないって言ってるでしょ、倒れるわよ」

「別に耐えられるよ。危ないって思ったら水も飲むし」

床に目をやればペットボトルが一本転がっていた。中身はあと半分程度残っている。エアコンが吐き出す冷気にようやく部屋の中で籠っていた熱が冷めていく。

「また背が高くなつたんじゃない」

悠は相変わらず床に座っている。立っているわけじゃない。見ても解らないはずなのに笙子には身体の成長は見てとれた。脚はなくとも成長はするものだ。

「そんなの良く解るね」

「当たり前でしょ、あなたの保護者なんだから、当然の事よ」

彼女の名前は笹塚笙子。少年の名前は長瀬悠。二人に血の繋がりはなく戸籍上も親子ではない。笙子は今年二十五になるが未婚である。現在は身元引受人として少年、長瀬悠の保護者をしているにすぎない。

「もつと伸びて欲しいけどね」

少年の身体はまだその歳ほどもない。膝から下が存在したとしても身長は百六十に満ない。もう半年もしないうちに十六になるというのに男っぽさはなく女の子のような背と容姿をしている。スカートを履いて外へ出れば男は気付かずに声をかけるだろう。

そんな悠の黒髪を撫でるとその手に持っていた茶色の紙袋に悠は目をやった。駐車場からの短いなかで底には水滴が溜まっていて色が変わっていた。

「それカルコサの？」

「食べたい？」

「もちろん」

カルコサは天王寺駅近くに最近出来たばかりの洋菓子店である。店には珈琲も飲めるカフェがあり中高生から二十代前半の女性でい

つも満員になっている。いつだったか笙子が適当に選んで店に入った事があった。そのときに食べたチーズケーキが絶品だったため悠に買ってきたのがきっかけだ。

絶妙な甘味と程よい弾力感が調和して口の中に幸せが広がる。パイ生地は硬くチーズの部分と口の中で調和する。至高の一品が手ごろな価格で味わえる。

紙袋から取り出したのは長方形の箱とアイス珈琲。水溜りはアイス珈琲から出たものだった。ギターのネック部分を器用に太ももにかけると、箱の天井を開くとさっそくそばかすにチーズケーキを一つ取り出す。ふんわりとした生地が指の先で弾けると口にする前に笙子を見た。

「仕事？」

アイス珈琲は床に置く。透明のプラスチックカップには水滴が溢れている。

「そうよ。テレビがないから知らないのも当然ね。今度支給してもらうから見なさい」

エアコンの風の一身に受ける彼女は写真を一枚差し出す。ケーキはそのまま受け取るとその写真を見た。青い海が広がり緑の島とコンクリートのビル群を繋いだ巨大な橋が写っている。

——明石海峡大橋——

関西地方に住むなら誰でも一度は見たことがあるだろう巨大な橋である。本州と淡路島を結ぶ巨大な橋が写真には写っていた。悠もよく知っている改めて確認することはない。

「今、兵庫県で連続している自殺についてイザナギから調査依頼がきたわ。何でも同じ場所で自殺が連続して起きていて、たった二週間で四人。さすがに裏があると予測したって訳よ」

写真をよく見れば橋の中心でパトカーや警察が陣取っている。小さな豆のようなものだったがその服装や白黒パンダの車両が警察だ

と認識させる。

「自殺と僕に関係があるの？」

「単なる自殺なら悠の出番はないわね。イザナギも事件現場の確認を依頼しているだけなんだけだね。おそらく悠の力は必要になるわ」

「なんでさ？」

「感よ」

笹塚笙子の感は良く当たる。彼女の場合、感というよりは予見や予言に近い。これまでに得た知識と経験からの推測は、より正確さを増していくと以前語ったことがあった。

「まあ場合によっては悠の力は必要ないかもしれないわ。だから三日くらい経ったら着くようにして。もちろんそのギターも万全にしてね」

ギターを指す。エレキとも木製でもない。形状こそギターそのものだったが赤と黒の二色で構成された禍々しいものであった。

この部屋の中で見える私物といえば義足とギターくらいな物だ。

あとは作曲に使ったメモ用紙と文房具が散乱している分だけ。悠がギターを手にせずどこかへ出かける事はない。彼が生きていく上で必要なものだ。受け取って以来ずっと傍にある物である。

「当然、持っていくよ。でもなんでこんな依頼引き受けたの？ 確証はないんでしょ」

「贅沢は言っていない。ほら……こつちの世界じゃ卒業シーンが終わったばかりでしょ、だから新人の魔術師が多くてね。上から五月蠅いのよ、仕事はそっちに回すから笹塚さんにはこつちをお願いってね。それに、ここで点数稼がないと独立なんて夢のまた夢よ」

笹塚笙子、彼女の仕事は魔術師。魔術式を持ち寄り炎や風を起こす体現者。古来より神秘を起こす超常の者。傍から見れば綺麗なお姉さん程度にしか見えない。だが一度怒れば少々の天変地異を起こす。軽い気持ちでちょっかいを出そうものなら酷い目にあう。

一年と半年、彼女もまた魔術師の学院を卒業し新人の一人として

数々の仕事をこなして来た。一年に十人もいれば多いほうだが今年は十五人と大量の術者が関西にやってきている。笙子にとってはライバルが増えるだけで自分の地位を脅かす脅威が増えたに過ぎない。共に活動している悠も同じである。悠は歳相応の学校へ通う事はなく彼女の手伝いをしている。少年は魔術師ではないにしろ、生まれ持った力で彼女の右腕として活躍している最中である。笙子より後になるが昨年の秋頃より日本へやってきて活躍している。同業者の目を惹きつける者として充分な働きを見せていた。

笙子の目的は事務所の設立にある。

現代の魔術師というのは世知辛い物で肩身が狭い。彼らの能力は科学という技術にお株を取られその存在を映画や小説といった創作物でしか日の目を見ないのだ。その魔術師たちの目的は個人又は集団で魔術の研究を行なう場所を作ることにある。この世の中で彼らが大きな魔術を行う場合、専用の場所が必ず必要となる。笙子の場合は個人の事務所を作ることにある。彼女自身が追い求める探求心のためである。

だが笙子は悠が何をしたいかは聞いたことは無かった。

昔はともあれ現代では魔術なんて物はなくても人は生きていける。すでに魔術よりも科学は発展しているのだ。空を飛ばうと思えば飛行機を使えばいい。火を起こそうと思えばライターを、マッチを使えばいいのだ。呪文を唱えて杖を振るう時代ではない。そんなことをすること事態、センスがない。

オカルトや魔術の時代ではないと彼ら自身も言う。魔術師たちも火を起こすならライターを使うのだ。一々、呪文を唱えない。

しかし彼らが存在しなければならぬ理由もある。自然の摂理を人類が凌駕する日まで魔術師達の存在は必要となる。

そんな魔術師たちはその土地にある支部、連盟に参加し仕事を得る。笙子の参加している組織は今回の依頼先であるイザナギ。イザナギは魔術師たちに情報を与える重要な機関であり関西魔術連盟の地方組織である。

長瀬悠も現在はその組織に名前を連ねている一人である。

連盟は魔術師たちが規定に沿って判断し独立する権限を与える。

魔術師が自分の魔術の発展を目指す。その時、他人に害が及ばないとは限らない。権限を与えられ公式に活動する術者は関西において百に満たない。事務所を持つているのは一部の成金や資産家が多いとされる。そういった一部以外は自由気ままに仕事をこなしているにすぎないのだ。

事務所の設立には連盟より認可が降りる必要がある。笙子は未だ認可されていない。だが協力者たちの生活を優先した結果でもある。まだ十五の悠が一人で生活できることが理由の一つである。

「それで場所は？ この橋の真ん中？」

「見てのとおりよ。淡路島。明石から船が出てるからそれに乗るといいわ。着く前に現場もみれるしね」

写真ともう一つ、彼女はパンフレットを渡した。赤いタコのキャラクターが笑っている画とフェリーの写真が載ったものだ。背景には大きく橋も写っている。いかにも人の集まりそうな場所で橋には多くの車が走っている光景が見れる。悠はこういった人の多いところは好きではなかった。

「海だとしても人が多そうだね」

「交通規制もされてるわ。船を利用するお客が多くなってらしいわよ」

「好きじゃないな。他に交通手段は？」

「高速バスしかないわね。あと飛び降りには全部昼間に起きているから深夜に移動するのはなしよ」

悠は他人とともに同じ場所にいる事は好きではなかった。笙子は「あきらめなさい」と肩を叩く。彼らの仕事の大半は人気のない場所。自然に囲まれた農村やくたびれた廃村が主となる。また海や山の中といった自然のながが多い。確かに橋の下には海が広がり写真に写る淡路島の風景は緑一色の山だったが人の通りは途切れることはないだろう。

「じゃあ、私は先に行くわね。人と待ち合わせもしてるし」と言つて玄関へと歩いていく。

悠はそんな笙子に目もくれずパンフレットを見ていた。人の多い場所には行きたくは無かった。静にしていたかった。かといって我俣が通るわけでもない。そうしているうちに笙子は部屋を出て行ってしまった。彼女は土産と仕事の話を聞かせにやって来たにすぎない。用事を終えるとそそくさと出て行ってしまふのも当然だった。二人の間に必定以上の馴れ合いはない。

悠はまた一人になるとチーズケーキを一かじりする。甘いチーズの香りが口いっぱいに広がる。やっぱりこの味だ、と感心しながら目は写真へ向ける。その写真には上から下までいっぱいに青が広がっている。

アイス珈琲で喉を潤しチーズケーキの甘味に酔うと笙子の事はなかつたように再びギターの弦を張り始めた。

第一章二話

笙子が訪れた日から二日、悠はいつもの日常を繰り返していた。

昼間の間は部屋から一步も外へ出ずに新曲の作詞とギターの調整をするだけ。夕方の涼しい風が吹くとううやく義足をはめてギターと共に部屋を後にする。

一人向かうのは人通りのない河川敷。昼間は少年野球や散歩にやってくる人がいるこの場所も夕方頃にはすっかり途絶え悠一人きりとなる。頭上に見えるコンクリートの橋には車のエンジン音が忙しくなく流れていくが少年の姿に目を向ける者はいなかった。

ギターを掻き鳴らす。唄は歌わない。ギターはアンプも何もなしに音を響かせ自由に曲を奏でる。その音を聴くのは人ではなく川の中の魚や草むらに潜む小さな命だった。

三日という時間はすぐに過ぎた。その間、もう一人の尋ねてくる人物はどういうわけか来なかった。かわりに夜中になると「今、どうしてる?」「会いたいな」「私は今一人で空を見てるわ」と一方的な報告メールが届いたくらいだった。その受け取りに使っている携帯電話もまた支給された物の一部である。笙子のほかにも悠を訪ねてやってくる者はいらる。しかしこの暑さにまいつているのか来訪する事はなかった。

出発の朝は日曜日。青一色、雲一つない穏やかな日となった。気温もまずまずで時たま吹く風が半そでのシャツから入ってくる。笙子から渡されたパンフレットは明石からの出航となっていた。人ごみに紛れるのが嫌だった悠は出勤時間で混雑する朝を遅くに出ることで避けてから電車に乗った。

大阪の鬱陶しいビル群から緑が増えていく。たった五分もあれば景色は全く別の物となった。緑が流れ出してまたビル群、繰り返して変わる景色をぼうつと見つめたまま過ごした。

明石につくと港を目指して歩く。すると青い海、瀬戸内海が目の

前に広がった。港は日曜だというのに乗客の数が少なく列を作って並ぶ車もちらほらとあるばかり。笙子が言うほどのものではなかった。待合場所も十人に満たなようで繁盛している風には見えない。

悠が待合場所に入るなりその人々が無意識のうちに開いた入り口を見る。ギターケースを肩から下げ黒のジーンズとロングブーツを履いた少年の出で立ちにすぐに目を逸らした。ミネラルウォーターを一本自販機にて購入すると外へ出た。

中はクーラーが効いていたが悠にとってみれば自然の風のほうが心地よかった。幸い影は多く日の下に立つ事はなかった。どこまでも続くような青天が視界を染め上げる。この場所でギターを弾ければどれだけ気持ちいいだろうかと思いつつ空を仰いだ。

しばらく経つと列を作っていた車が動き出す。悠も係員に従って船に乗る。客たちを乗せた船が汽笛を鳴らして出航する。船の中では椅子が用意されているにも関わらず悠はそれでも風が吹く甲板にいた。懷から貰った写真を取り出す。撮った場所とは間逆の位置にいる。橋は巨大な姿を晒しておりその巨大な身体を車が何十台も移動している。それに比べ船のなかはがらがらだった。旅行客を乗せた船はゆつたりと淡路島を目指して進んでいる。

約四キロもある超大型の橋は微動だにせずどっしりと腰をすえてその場所に存在している。本州と淡路島を結ぶその橋の上を何十台もの車が途切れることなく走っている光景は悠にとっても壮絶なものであまりの大きさに圧倒される物があった。

列を成して走るそれらにぼんやりと意識は惹きつけられる。大阪で笙子が言っていたことを思い出す。連続して起こっている自殺の現場というのがその橋の中間にある。写真で警察が陣取っていた場所だ。悠は自然とその場所に目を向けるとじつくりと見た。テレビもラジオも持っていない悠はここへ来るまでに知った情報は街頭で流れているニュースくらいな物だった。辛辣な顔をしたキャスターが哀悼の意を込めて話す内容はどれも同じように聴こえた。

自殺の方法は皆、同じ。橋の中央付近まで車で移動すると車を停

めてそこから飛び降りる。残った車には免許が残っており引き上げられた死体も一致していることからその点において不自然な場所はない。これまで自殺した人数は四人。すべての自殺で目撃者が存在している。だが誰も止めようとしなかったとキャスターは語っていた。

悠は青い空に目を向けようとして目を持ち上げようとしたが反対に落ちていく豆のようなものを捉えた。橋の中心から零れ落ちたその点は足元に広がる海へ一直線に向かっていく。ただその場所から下に向かって落ちる。

最後、悠の瞳にだけは海に落ちる直前で白い靄が見えた。

「……五人目か」

豆だと思っただけに見ていたものは間違いなく人間だ。おそらく海面に衝突した瞬間に死亡しただろう。橋の高さを考えれば生きて上がる事は万が一にも有り得ない。海面に衝突した時点で死亡は確定する。口にした直後、背後で悲鳴が聴こえた。

甲板に出ていたのは悠だけではなかった。スーツ姿の女性が一人そこにいた。彼女もまたさっきの飛び降りを見ていた。顔が青ざめてスカートから伸びた細い脚は震えていた。それでも悠とは違い彼女はすぐに携帯電話を取りだしている。

それにしてもさっきのはなんだろう。不自然だ。まず昼間のこれだけ交通量を維持しているあの場所で飛び降りるだろうか。死ぬのなら交通量の低い深夜を狙えばいい。それとも誰かに止めてもらいたかったとでもいうのか。

理由はわからない。

「ね、ねえ。君も見ただしょ」

電話を終えた彼女が悠に向かってやって来る。笙子とは違う長いポニーテールが風で煽られてよく揺れている。

「見たよ」

「君、なんとも思わないの？」

あまりにも関心のない言い草だったため顔を覗いてくる。前髪に

隠れた悠の瞳は黒を映し出し中心に青い点を映していた。人の目とは変わった色だったが女性にはその色を見ることが出来なかった。ただ関心のない瞳だけを彼女は見た。

「そんな言い方って」

「なら落ちるとき白い靄は見えた？」

「なんのことよ？」

無関心な少年の言葉に対しどこか怒りにも似ている口調でもあった。それほどまでに悠が無関心に見えていた。事実、彼に自殺を図る人間に情は持ち合わせていない。

どれだけの事があっても自ら命を絶つのは許せない。

「別にあんたが気にするようなことじゃないか」

よほど気に障ったのか、かっとなって目を見開いた。怒る彼女を見て悠はよく見れば綺麗な人だなと感心する。しかし他人の生き死、それも自殺に首を突っ込んでどうしようと言うのかと冷めた気持ちも同時に湧く。目の前にいる女性にはさっきの死が飛び降り自殺以外のものには見えていないはずなのに、と心の中で思えばかりだった。

「そんなことだと自分が死んだとき誰も悲しんでくれないよ」

怒ることをやめて女はそう言った。二人とも口喧嘩などしている場合ではないと距離を置く。

無言のなか、橋の上では停まった車を見つけているはずと思う。

じきに警察がやって来る。なにもここから連絡する必要もない。笙子からの連絡では橋には一日数回の見回りが出ていると知らせもあった。海に落ちた人もすぐに引き上げられるだろう。

「気にしないさ。僕はあんな死に方はしない」

素気なく返す悠。女から目を背けて海と空が広がる光景を視界に入れる。

（さっきの白い靄…… あれは……）

これまでの半年で嫌と言うほど見てきた靄と同じ形をしている。もし彼女にそれが見えていたなら少しはおかしいと言うはず。なの

にそれはなかった。だとするならとギターケースに意識を促す。ケースの中で張り替えた弦が撓る。笙子の感はどうやら正解だったようだと言意識が高まる。

「私、行くわ」

悠は答えなかった。自分のすべきことを捉え見つめる先には青が広がる。潮風と太陽が交差し目的の島が前方を埋め尽くす。

（そんなことだと自分が死んだとき誰も悲しんでくれないよ）

さっきの言葉がなぜかよぎった。彼女の言葉に想いを巡らせたが自分のために悲しんでくれる人がどれだけいるだろうか。

まあ笙子さんくらいは損をした程度には思ってくれるだろうけど。それだって損得勘定でしかない。律先生に申し訳ないとも思つかない。返事の返ってこなかった彼女の表情は曇っていく。しばらく橋の方を見て船内へと戻って行った。

第一章三話

橋を後にし淡路島に近づく船が一度大きく揺れた。ケースの中でまたギターの弦も揺れる。もう一度、笙子の感に間違いはないと確信する。

かなり距離はあるが現場を見られたのは好都合。ギターの弦が震える様が手にとってわかる。あれが本人の意思で行われた自殺ならこつはならない。ギターを取り出す。遅かれ早かれ必要になる。あれは笙子さんじゃだめだ。いずれ白い靄は物体となつて現臨する。久しぶりの大仕事になるかもしれない。

船は一度大きく揺れはしたもののその後はたいした揺れは無かった。大きさは違ったが誰も異常に思わなかった。何より無事に淡路島の港へと到着した。潮の香りが散漫した漁港が続く。見上げると大きな山が視界に入る。民家はまばらでアパートやマンションのよくな集合住宅は見られない。

「遅かったじゃない、悠」

港、といってもコンクリートの駐車場が広がるばかり。その駐車場のはずれ、送迎用の列から笙子がやってくる。随分と待っていたように手にはペットボトルがあつた。中身はもうほとんど無いみたいで容器の中で跳ねている。彼女は田舎でも黒のスーツ姿で悠を迎えた。その姿が周囲とかけ離れていた。

「おかげで一つ見れたよ」

「こつちも連絡を貰ったわ。もう警察が動いている、あら……イザナギの子と一緒に乗ってるはずだけど知らない？」

周りを見回す。悠の背後に近づく一人の女に向けられた。悠が振り向くと女があつと驚く。さっき甲板で話していた人だった。驚きの顔はしたもののすぐに仕事の顔へと変化する。

「笹塚笙子さんですね、イザナギより参りました。四条彩です」

魔術師が仕事の依頼を引き受ける際、事件の報告と現地での行動

を支える特派員がいる。毎回、地域と事件の内容によって特派員は変わる。これまで笙子が出会ってきた彼らはかなりの数だったが四条彩とは初めてであった。

「はじめまして四条さん。こっちは私のパートナー長瀬悠よ」

ちよこんと頭を下げる悠。

「さっきの……」

再び会う二人。甲板でのやり取りに四条が先に謝った。上下関係は彼ら魔術師たちのほうが上になる能力の有無が一つの壁を作っている。悠からすればそんな事はどうでもよかったが彼女の場合、そうはいかない。

「さっきはどうも。長瀬悠です」

「うそ、若いつて聞いてましたがまだ中学生じゃないですか」
確かにそう見える。年齢もばっちりあっている。生い立ちを知らないなら当然。しかし本人はもうこの手のことには慣れていた。

「大丈夫よ。イザナギだって悠の力は認めているし何より今回の相手は私より悠のほうが良いはずよ。ねえ？」

笙子も今回の件を気付いていた。悠へと視線を動かすと言葉の意味を理解してうなずいた。今回は魔術師に出番はない。必要なのは別の力である。

「それじゃあ、海月荘へ行きましょう」

「それどこ？」

「現地の協力者が用意した元民宿よ」

送迎用の車を作る列。その中の一台、一番みすばらしいワゴンR。タイヤ周りは泥まみれで随分と洗っていないため付着した汚れを全体に纏っている。そのワゴンRの傍で男が立っている。三人が近づくと小太りの中年はタオルで汗を拭きながら礼をした。

「どうも遠いところを」

「現地協力者の日高さんよ」

「イザナギの四条です。いつも協力ありがとうございます」

四条の礼に伴って悠も礼をする。魔術師のサポートは大半が一般

人である。都市部だけでなく離れた地方にも多くいて彼等の仕事に携わっている。といっても魔術師たちのサポートは寝床の確保や物資の補給などで直接戦闘に関与することはない。それぞれの役目をまっとうするためにいるのだ。

日高の車に乗り込むとワゴンRはタイヤを軋ませた。軽い三人の体重でもこの車には非常にきついものだった。しかしながら小さなワゴンRの中は冷房が効いていて涼しい。空からの光を遮るものもないこの場所では最高の場所となる。コンクリートの港を出て海を横目に車は走る。窓をほんの少しだけ開けると潮の風が車内に入り込んでくるのが心地よい。

「見てきたんでしょう」

助手席から後部座席に座っている悠へ振り向きながらに笙子が言った。車内全員、なにをと聞く者はいない。悠は首を縦に振る。

「どうだった？」

笙子も見当はついているのだ。

「不自然だったよ。これまでの自殺がどうか知らないけどあは…

…」

「妖魔だった。それもかなり大きいよ」

につこりと微笑むと身体を前に向けて話を続ける。

「まだ実体化は先だよ。でも放っておくとまた死人が出る」

「これまで自殺した人たちの経歴を調べるといくつか面白い点があるってね。それについては話すほどのものじゃないけど聞く？」

「べつに聞きたくないよ。それにもっと近づかないと解らない事が多すぎる」

落ちる様だけを見ていたに過ぎない。だが現場で見た白い靄。隣りで話を聴いている四条彩には見えなかったあの靄こそがこの先、何が起きるか予想できるひとつである。あの靄はいずれ実体となって現れる。

「さっそくで悪いけど現場を見たいんだ。船は出せる？ 小さいやつでいいんだけど」

言い切るとちょうど車が停まる。信号は赤だった。港から続く小さな町がすぐ傍にある。今度は運転していた日高が口を開いた。

「そりゃ無理やな」

一人、度のきつい関西弁だった。ルームミラーで日高と目が合う。彼は肘をドアに引つ掛けて信号の色が変わるのを待っている。

「イザナギの仲間から連絡が入ったんやけど、さっきの被害者を引き上げるとか何とかで漁師も一般人も船はだされへんねん」

やはり警察はもう動いている。遺体の引き上げが優先されると言うわけである。

「少し離れていてもいいから、現場が見たいんだ。自殺はこれで五人目、あれが現臨する前に仕事を終らせられる可能性だってある」

あの場所に近づかないとこちらも打つ手がないとする悠。

「せめて橋の上に出て現場を見下ろすくらいはしないと……確かな位置さえつかめない」

「無理を言っではいけませんよ。こちらにはこちらの事情というものがあるのです。イザナギにはイザナギの。警察には警察の、というふうな。ですから長瀬さんの事情もわかりますけどここは我慢です」

と、几帳面というよりは真面目な返し。

「四条さんの言う通り。今日一日くらいゆっくりして明日から動きましょ。必要なものもあるでしょ？ 新しい義足も届く手はずは出来ているわ」

皆して待つ的一点張り。悠としてはすぐにでも海に出たかったがそれも仕方なし。笙子は相変わらずのんびりで夏のバカンスを愉しんでいるにすぎない。人の命に関わるかどうかよりも仕事はさつとこなした方が良いに決まっていると悠は窓から映る海に目を向けた。こんな事だから事務所は先になる。そう思うも少年は告げられなかった。

「わかったよ」

あきらめるしかない視線はまた窓の外。大阪とは違う。昼間だ

というのに歩いている人は少なく、数人の歩行者も港へ向かっていくばかり。誰もが肩に釣り竿を掲げていた。再び動き出すと景色は随分と変わって山の中へと入っていく。緑の色が全面に現れてくる。橋の姿はまだ映っているが道路の様子は見えない。

「でも驚いたわ、仕事熱心なのね。もっと冷めてるかと思っていたわ」

外を眺めていた悠に彩さんが言った。なぜ、と問うと彼女は口を軽快に動かしてはじめた。

「だって船で会った時、どうでもいいって感じに見えたんです。それにこれまでイザナギへ集められた調査レポートに載っている悠君の人物像を考えるとそういう印象を持たなかったもので……」

「それもそうね」

笙子が頷いた。彩の手荷物はノートPCが入ったケースとハンドバッグ。これまでの特派員も同じように同じノートPCを持っていた。レポートを書いていた。悠が何度も見た彼等協力者の姿である。彼女たちの仕事は戦闘ではない。あくまで事件の内容を詳細にまとめる事。そして事件の内容には担当した魔術師やその他の現地協力者の事柄も含まれる。その他に事件の終了と共に魔術師たちにも調査レポートの提出を要請する。魔術師がイザナギへ提出し二つのレポートが揃った時点で事件は幕をおろすことになる。

その後、連盟本部の京都にて事件の内容を鑑定し魔術師の評価へとつながる。

ただ、いつも笙子が引き受けて書いて提出するため悠は自分の事をどう書かれているか知らない。またそれを読んだ事もない。

「ちょっと安心しました」

「そう」

やはり素気ない対応である。後ろに見える港町には活気はなく人氣はないように感じた。事件が発生したため海に出ていた船も戻っていく姿が見えている。車の量もやはり大阪とは比べ物にならない。車はゆっくりと山を登っていく。およそ人の入る場所ではない山道

を車は登っていくことになる。地面も整備されていないからガタガタと揺れて下を噛みそうになるほど。

車内から後ろを見ると青い海が姿を現れる。ほぼ一面、青でその下にうごめく影がいることなど思えないほどに清く美しい光景だった。

橋の姿も捉えることが出来る。橋の下の現場へと船が向かっていた。港へ向かって戻る船とは違い二艘のボートは橋へ密着するように視界から消えていった。おそらくあれが警察の船だろうと見る。あと一時間もあれば悠と彩が見た死体は引き上げられる。これまで飛び降り自殺で死亡した人間は発生から二時間以内に見つかっている。どれも橋に身体が引つかかるようにして浮いていた。

一度、大きく車体が揺れて全員がどつと浮いた。
「着いたで」

日高は語尾を大きく強調するような物言いをして車を日陰に停めた。悠が視線を前に向けると雨や泥で汚れた看板に海月荘となんとか読める名前が書かれていた。

「ここが海月荘なの？」

「そうよ。どう？」

どう、と言われても見えるのは車二台分の駐車場……もとい木によって出来た日陰。先に停めてある一台は軽トラック。軽車二台で埋まってしまっている。まあ起用に動かせば軽トラックも出られるだろうという程度。

山中を無理やり切り開いたような場所には一軒の家が建っているに過ぎない。日陰から家までは歩いて数歩程度の距離しかない。家も木造で古い。溜め息が自然に出るほどのボロさである。

「どうもこうもないよ。なんだ、いい物あるじゃないか」

車内から出ると軽トラックの二台に水上バイクが目に入る。黒く鈍い光を放つまさしく新品。それはこの場所において一番、新しいものだった。

「用意してもらったのよ、二人しか乗れないけどスピードもでるわ」

「最新式だからはっええぞ」

にやりと笑って玄関に鍵を差し込む日高。こんな場所に鍵をかける意味は果たしてあるのかと疑問もある。外の熱さは変わらない。だと言うのに家の中は涼しく風が吹いていた。悠の部屋とは別物で風は途切れず熱も籠らない。

「よかった、窓を開けという正解だったな」

すると「でしょ」と親指を立てる笙子。「ここの二階で待ってたんだから」と中へ入る。狭い玄関をくぐる。靴はなくここには日高さん以外にはいないと知らせていた。

「さあさあ上がってください。どうせ誰もいないんで気楽にしてくださいよ」

すでに三人は階段を登り始めていた。全員、手荷物は少ない。悠も唯一の荷物であるギターケースを持ってあがる。木造の階段はため足を進めるたびに床がきしむ音が出ず。古い建物だというのは外から見ても解る通りだった。

「壊れかけとるところもあるんやけど大丈夫やで。床が抜けるなんてないから」

ぎしぎしと音を立てながら二階へと進む。海月荘のなかには太陽の光を漏らさぬようにとどこもかも輝かせている。古いというが埃はなくこまめに掃除をしているのが良く解る。

階段を上ると左右に部屋が分かれている。家の中心にある階段はまるでセンターラインのように設置されていた。廊下は短く両方の部屋は話し声が聴こえるほどであった。

扉は閉められていなかった。左の部屋には笙子の荷物が置いてある。

「悠はそっちの部屋ね。四条さんは私と一緒に」

彩が「はい」と元気よく返事をする。そのまま後ろに回ると彼女の肩を掴んで部屋へと連れて行った。そういえばと悠は笙子の後ろ姿を見て思う。笙子は男女関係なくモテる。どういうわけかイザナギの特派員には彼女のためにと自分から名乗りを上げる人がいると

聞いたこともあったほど。普通、魔術師は気難しく相手をしたいとは思わないはずなのだ。

「そんじゃわしらも行きましょう。こっちですよ」

わざわざ案内する必要もないというのに日高は悠の前を歩いていく。ようやくやって来た部屋は殺風景な八畳間。一人でいると広いと感じる部屋には小さな机と布団だけが用意されていた。押入れもあるが使う必要はなさそうだ。

丁度、陽の光から外れた角がある。ギターケースをそこへ置くと全て終わる。荷物は唯一このギターケースだけ。隣りにある窓は開いており風が流れて入ってきていた。大阪と違って潮の香りがする。あのコンクリートの焼け焦げるような匂いはない。しかも先ほど車から見えていた明石の海が広がっている。絶好の場所だった。

「それじゃあ、わしは一階にいるんで落ち着いたら来てくださいね、美味しいお茶もあるんで」

部屋を出て行く日高に「はい」とまるで子供のように笙子は手を挙げて答えていた。彼は笑いながら一階へと降りていく。また階段の軋む音が聴こえる。

一人になったといっても廊下の先にある笙子たちがいる部屋は丸見えだった。彼女たちからは窓の外を見る悠の後姿が見えている。

外の風景から机に目を向けた。これまでイザナギの関係者がここを使った痕跡は随分と残っていた。机には引き出しがあり中にはたくさん紙が入っていてめいっばいに文字が書かれている。おそらくこの部屋で様々な計画を練った証明である。ここで仕事するのは初めてというわけではないのだ。

魔術の専門知識は少ない悠でも解るほど奇怪な文章と文字だった。それらをしまつて再び外を見る。海に出ていた船が動き出していた。あの警察の船だった。橋の影から出てきた船には白い布のようなものが敷かれていた。そのまま明石のほうへ向っている。どうやら警察はさっきの遺体を見つけたようだ。

第一章四話

海月荘の一階には風呂と台所など一般家庭と変わらない設備がある。しかし民宿としての施設らしき物はこの建物ぐらいな物であった。木造であるが部屋は多く一階には他に部屋が三部屋ある。どの部屋も八畳ほどあり団体を迎えても問題なさそうに見える。

事件の内容を聞くために四人は茶の間に集まっていた。畳張りの部屋は広く四人いても半分も埋まらない。悠の住んでいる部屋と違いくかなりの大部屋である。彼らのほかには一時代、昔の雰囲気のなかでノートPCとプリンターが存在している。

「どの人物も橋の中央付近まで車で走行し、そこから飛び降りるといった行動に出ています。遺体の回収はされているようですが中には損傷が酷く本人確認が非常に困難だった人もいるようです。ですが車の中に免許証が落ちていたり本人が所持していたりと手がかりは豊富だったと報告されています。ああ……また精神的に病んでいた方もいますね」

わんさかと情報がプリントアウトされていく。イザナギのほうで回収したデータが机で広げられていく。履歴書のように写真と経歴が記載されている。四条彩のPC内にある情報は彼女の性格どおり几帳面であった。一枚を手にとつて見るが特に変わったところはない。悠の见ているデータは大学を出たあと一般企業に就職したとされる男性のものだった。備考の欄には借金で苦しんでいたと書かれているが返済が滞ることもないと記されている。

「自殺全てが奴らの仕業じゃないよ。絡んでいるのは間違いないけど別の何かがいる」

「わかるの？」

「なんとなくね、妖魔があんなふうに気取らせるなんてのも珍しいんじゃないかな」

現場に出ればもつと確かな事が解るといふ考えに違いはない。笙

子や悠が奴らと言うのは誰であろう事件の首謀者にして元凶。妖魔と呼ばれる怪物。今、ここに笙子と悠がいる理由。

「別の何か……まさか魔術師が絡んでいる？」

「ここへ来た時からあの場所を日に三度は見たけど魔術式の類はないわ。そっちは私が保証する。なによりあれだけ巨大な橋になるとそれ自体に必要な魔力も膨大なものになるわ」

明石海峡大橋は全長約4キロ。日本でも最大クラスの巨大な橋。

それも地上から離れ海の上という立地条件。いかほどの魔術師といえどこの場所を意のままにすることは不可能に近い。

「まして特定の人物を誘い出して自ら飛び降りるようにしようと思つたらとんでもない力になる。網を張るなら一人ではなく複数で行なう必要があるわ」

笙子自ら魔術師の存在を否定する。こちらへ先にやってきていた笙子は何もしていないはずも無い。彼女にできる事は全てしている。「それでは一体？」

悠は「さあね」と呟いた。何がどう絡んできているのか詳細は不明で手元に集められている死亡者のリストも今のままでは意味がない。自殺というのは人目に付かない場所を選ぶのが普通だ。人知れぬうちに山に入ったり崖から飛び降りたり。最近では集団自殺もあるようだが今回の件は違う。何よりあれだけ目立つ場所で飛び降りるのはどうだろうか。学生なら馴染みのある学校の屋上から飛び降りるということもありえるが被害者はどれも社会人。しかも中には毎日のように仕事で通行するだけの人物もいる。彼らにとつてあの橋は日常の道でしかない。そのような場所でなぜ死ぬのか。答えは出せなかった。

「なんであそこを選んだのかな」

何気なく声が出ていた。

「解らないわよ、死にたいけど止めてほしいって人もいるでしょうし。そういう人からすればああいった人の行き交いが多い場所は絶好の場所になるんじゃない。普通なら、ね」

橋の上は高速道路になっている。もしあの場所で飛び降りようとしているのを目撃してもそこで車を停めてわざわざ飛び降りをやめさせようとする人間がどれ程いるか。考えてみてちよつとした絶望を悠は感じた。走る車の速度は八十キロ以上の高速だ。他人の行動に気を回す人は少ないだろう。

実際、五人の飛び降りは誰も止めてはいなかった。

鬱そうとしたなか、日高がテレビをつける。まだブラウン管の箱状モニターが映したのはここから少し離れた場所だった。橋の上からヘリで撮影している。二階に出れば窓から見える景色とそっくりだった。アナウンサーの声がテレビから流れてくる。

机の上ではこれが限界と三人もテレビからの情報を耳を澄ました。画面には海が映り橋の下で警察の船が移動しているのが見える。その映像の中、黒い影がぼつりと映り込む。笙子と悠だけが解るものだった。日高と彩は何事もなく見ている。

橋にはガードレールの傍で停車している車が映っている。死亡した人物の車だろう。黒い影はその車からすぐ傍で濁りのように染み付いている。カメラが離れる瞬間、その影もまた移動する。

事態は急を要する。携帯電話を取り出した彩がイザナギへと連絡する。話しの内容は詳しくする必要はなかった。画面に映る情報を見ていた人物はここ以外にもいる。電話の先も同じ映像を見ていた。「それではお願いします」

彼女が話を終わると悠たちに言った。イザナギは今晚一艘の船を現場近くまで出す。妖魔の出現は関係なくあれを止めろというのだ。先の飛び込みから二時間もなく二人目が飛び込んだ。この後、橋は厳戒態勢となる。

「せめて慧が来るのを待つてほしかったわね」

笙子が言う。遅かれ早かれ悠の頼みは叶えられる事となった。でも海に出られればそれで事は済む。

大事なのは相手と同じ場所に立つということ。
人ではないものであっても。

四人は船が出るまでの間、それぞれ適当に時間を潰す。時間は三時間。悠は一人、麓まで降りてみたいといって出て行く。青一色だった空はねずみ色の雲が覆い被さってきていた。降らなければいいかと願うがそれは無理なようだ。

道に出ると港を目指して歩く。突如として携帯電話が震える。取り出すとメールの受信だった。開くと「台風が近づいてるよ」と短い文章が現れる。

「大丈夫、解ってるよ」

空を見上げて呟いた。昼間、ここへやってくる時の青天は既に消え空の半分はすでに雲でいっぱいになっている。いつ雨が降りだしてもおかしくはない。ようやく着いた港には波が押し付けていた。風は強く吹きこれからの出来事を物語っているかのようでもあった。夕方になるともはや太陽の姿はなく雲が世界を覆っていた。遺体の引上げ作業を終えた警察は海から姿を消して今は対岸にいる。橋の上では停まる車がないかずっと監視が続けられている。曇天となった空はいっ降り始めるのか、船が用意されるなかで悠は見つめていた。黒と灰色に覆われている不吉な色をしている。波は高く周囲には悠達以外に人はいない。嵐の前の静けさに皆、危険を感じて家に籠っている。空が曇ってきた頃、丁度悠が港に出た時にイザナギ本部からという名目で明石から四人乗りの船を一艘をやってきた。海月荘にある水上バイクでは二人しか乗れないためこちらにする。少し笙子が落胆していた。彼女の場合こういった船よりバイクで颯爽と走りたかったのだ。とはいえ二人を乗せた船はぐんぐんと波を掻き分け進んでいく。海の青は雲の濁りを受けて黒く光を失っていた。船の舵を取るのには日高である。彼は荒れる海を速度を保ちつつ殆ど揺れさせずにいた。

「さすがですね」

髪を抑えて先頭に立つ。風も水しぶきも全て受けながら彼女は言った。

「俺も昔は猫に出とったからなー」

一般の船、それも五人も乗ればすぐに誰かがはじき出されそうな大きさをしている。加えて海の荒れは益々強くなるばかり。橋の付近へ近づくのは危険だと知りながら、ゆっくりと近づいていく。笙子と違って悠は足元がおぼつかない。なんとかボートから振り回されないようにとしがみついている。

「弦は震えてる？」

気付かなかった、笙子は悠の脚よりもその力へと目を向けていた。無理もない。笙子は悠になにも問題ないように見えていたのだ。ギターは港から出る前にケースから出している。そのギターには全くといっていいほど反応がない。首を振って伝える。昼間、ここを通ったとき弦は確かに震えた。今は波とは正反対に落ち着いている。少年の心は震えていた。

「もつと近づいて」

言葉どおりにもつと、もつと船は進んでいく。その度に波はきつくなっていた。すでに現場との距離は十メートルもない。すぐ傍に自殺した人間の身体が落ちた場所がある。首を曲げて見上げれば天空まで届きそうなほどに巨大なコンクリートの柱が立っている。ギターに相変わらず反応はない。船に乗ってやってきた時、ここから随分離れていたが感じた気配はなかった。単にここには居ないという事なのか、少年の瞳は周囲に向けられた。

一度、船が停まる。気を静めてギターを構える。足を踏ん張ればどこにもつかまらずに立てるようだと思いを閉じた。心を落ち着けてそつと相棒を抱く少年はその意識を海底まで落とす。

瞬時に僕の魂が弦を震わせた。

「やっぱりいる」

ボディに流れる赤がじんわりと光を帯びていく。悠の鼓動とギターの鼓動が同調する。船の周囲には物体による衝撃ではない自然のものとは違う波紋が広まる。膝から下の義足は意としないところで耐えていた。震えが膝に伝わる。しかし意識はもつと下に落ちていく。すでに少年の心はここにはない。

膝から義足へ、義足から船へ……そこから蒼い海の底、黒い闇の底。

意識の落ちる先に波のうねりはない。海底は非常に穏やかで船のある水上とは違っている。身体が自然と動き指が弦に触れる。どんな音かはさして重要ではない。鼓動にあわせて音になる。単なるひとつの響きが連続で鳴りリズムを刻む。

「はじまったわね」

ギターの音はアンプなど一切の道具をなしに奏でられ音はまるで空気を背に反響する。波の音など全てかき消すしなやかに彩られた音。途切れないように紡いでいく。指は思考とは別のところにある。「この辺りを回ってみて」

弦は指とは別に揺れている。だが一向に目的のものは見えずにいた。船が再び発進すると瞳にぼんやりとした蒼が浮かび上がる。

いつもと同じだ、問題はない。

海の中では魚がこの場所を避けている。一切の生命が消えた。場所はある。そう全ていつも通り。だが義足に違和感が走った。無機質な単なる物がひびの入ったような崩れた音を立てる。いつもという全てが一瞬にして崩れさった瞬間。

それこそが発端だ。

同時に船に振動が起きる。岩にぶつかったような激しい衝撃。

繋いでいた意識が完全に途切れる。海底から海上まで一瞬で戻ってくる。並行であったはずの視線はゆがみ右側へ傾いていた。身体から義足が外れている。そればかりかはずれた義足ごと悠の身体は船の上にはなかった。

「悠！」

宙に放り出された悠がようやく事態に気付いた時、笙子は叫んでいた。手を伸ばしていた彼女の姿から遠ざかる。悠は自分よりもギターを優先して放り投げる。手から放れると赤く宿った光は消えていく。笙子がギターを手にしたのを確認できただけまだマシだった。義足から離れた身体は襟を掴まれる。強力な力だが姿は見えない。

力で無理やりに引き込まれる。悠の身体は軽く貧弱である。肉体面においては外見同様少女並み。その力に抗うことなど出来なかった。笙子と目が合う。その直後、瞳は蒼に包まれた。

冷たい海水に身体が溶かされていくような感覚ただ引きずられて底へと落ちていく。今度は意識だけではない。身体も一緒だ。義足が外れていたのは幸いだ。再び海面に上がるなら腕だけで泳がなくてはならないのだ。義足が付いたままだったなら重くてとても泳げない。悠の目には義足が落ちていく様が見えた。海底の底にある砂がふわりと巻き上がる。

最後の一瞬で吸った空気も長くは持たない。まるで錘のようになつた悠を落としていく。誰かが引き上げない限り悠は海面には戻れないだろう。なら、と瞳を凝らす。先の事がある。必ずいる。

「さあ一緒になりましょう」

ここは海底、魚一匹いない。深き黒の世界。上から見れる青い海など存在しない。ましてや声などかけられるはずもない。

「かわいそうな子……まだ若いのに」

人が言葉を話せるはずはない。なのに悠の前に現れた女は声を出す。

全身が蒼のなかでもはつきりとわかる。長い髪は足の先まで伸びていて半身は焼け焦げていた。顔は青ざめて頬の肉が削がれたようになくなっている。そのくせ瞳はやけに美しく生きているような輝きを見せている。

「あなたも一緒になりましょう」

脳に響く声だった。そればかりか黒く燦った腕が伸びてくる。悠の瞳に恐れはない。腕に掴まれる前に息が持たなかった。空気を求めて口が開く。しかし入ってくるのは海水ばかり。すでに意識は朦朧としていた。

少年の身体は限界を迎える。吐き出した息の泡が昇っていく。薄れていく意識の中、遙か空へと伸ばした腕を女が掴んだ。半身が焼け焦げた女ではない。まぎれもなく実体であり生きている女の手だ

った。暗闇の如く光のない海底で人の暖かみに繋がれた。だが掴み返す力などなく悠は意識を失った。

第一章五話

溺れた悠を拾い上げて数時間が経つ。海はますます荒れ雨が降り風は強くなっていた。台風之余波はすぐそこまで迫ってきている。

海の底へと落ちていく悠を引き上げた時、意識はなかった。僅かな時間ながら悠の身体は芯まで冷えきっていた。笙子は日高と分かれ一人、海月荘へと戻った。倉庫からストーブを取り出すとすぐに悠を暖めた。外傷はないように見られ死を免れたが意識は戻っていない。今はただ静かに眠っている。

「手間のかかる子……」

眠りにについている悠の額をさする。

「笙子さんは大丈夫ですか？」

海に入ったのは一人ではない。海底近くまで追いかけた笙子もまた同じ。シャワーを浴びてきた彼女に四条彩は茶を淹れて待っていた。海に残った日高はまだ船を港にしまっている。今、海月荘には彼女らしいない。そのためか、笙子はバスタオル一枚で過ごしている。

「私なら問題ないわ」

腰をおろすと無防備な身体がふんわりと揺れる。彩は彼女の身体から視線を外した。同性でありながらもその色香に頬が赤くなるほどに笙子は魅力的であった。しばらくはラフな格好でいられる、という安易な考えが周囲を惑わせる結果になる。

「でも悠が意識を取り戻すまでなにもできないわね。義足も落としてしまったみたいだし」

義足は海の底にまで落ちている。悠を助けた時、義足は後回しにした。引き上げる道具もなかったため仕方がなかったのだ。回収するには台風が過ぎ去るのを待つしかない。それには二日以上かかると思われる。荒れた海の中で回収など出来るはずはない。

悠の容態は変わらない。笙子は服を着ると彩と一緒に一階へと降

りていった。居間へと移動するとテレビをつける。ちょうど気象情報映っていた。現在、兵庫県南部に迫っている台風はあと三時間ほどでその暴風圏に入るとされる。テレビではレポーターが徳島で暴風の中、実況していた。

「強そうですね」

「早く通り過ぎると思ったんだけどね、やっぱり当てにならないわ」
呟く彩。あの台風が去るまで義足の回収は不可能だ。笙子が引き上げる時も海は逆巻き唸っていたのだ。とても船を出すことさえできない。

「でもどうするつもりですか。悠君が事件を解決させると言うなら足は海の底ですよ」

「代わりが届く手はずよ。それも今向かってきているわ、台風と一緒にね」

微笑む笙子の前で携帯電話が鳴った。丸い卓袱台の上で震えて小さな地震のように揺らした。黒のメタリックカラーの二つ折り型。鈍く光り青いデジタルモニターが相手の名前を表示していた。

「どうしたの」

携帯電話を手に持つと開いた。名前も告げずに言った。

「悠の電話がおかしい。なにかあったの」

笙子には誰からの連絡がわかっていた。穏やかというよりはあまりにも冷静すぎる声だった。まるで氷のような冷たい刃物みたいな音で女、時雨は言った。

「鳴らなくて当然よ。海に落つことしちやっただから」

「あれほど気をつけろといったのに……悠は？」

「寝てるわ。起きたら連絡させましょうか？」

しばらくの無言の後「しなくていい」と告げて通話が途切れた。笙子は耳元から電話を離して液晶の画面を見る。待ち受け画面へと変わった液晶には黒い髪をした背の高い男と一緒に映った彼女がいた。まだ笙子は幼く学生服を着ている。男のほうは片目を隠すように長く伸びた髪をしていた。

「例の？」

その問いに頷いてみせる。

「あの子も心配なら来ればいいのに」

「確か今日は定期検診ですよ。先輩達も言っていました」

あっと思いついてハハハと笑う。笙子の周りには三人の協力者が集っている。一般的な魔術師として普通。一人は二階で寝ている長瀬悠、さっきの電話をかけてきた冷たい印象を与える女、時雨。そして最後はここへと向かっている織戸慧。全員、魔術師ではない。しかしながら彼女のサポートを確実にこなす者達である。

ただ一人、時雨だけは別である。彼女は人ではない。関西魔術連盟から定期検診を常に受けることを約束に行動を許された人外の類である。

「イザナギのレポートでは悠君はいつもこういった意識障害に陥るようですね」

彩は再びパソコンを広げていた。モニターには長瀬悠のデータが映し出されている。その一箇所、彼女の言う通りで事件の途中で大半、悠は気を失っているという報告が記されていた。特に今回のようなケースでは必ずといっていいほど。

「私、今回笙子さんと仕事をするなんて聞いて悠君のレポートを見て思っただけです。この子は危ないって……笙子さんはいつも傍にいて大丈夫だと確信されているのかもしれませんがあまりにも」

「危険よ」

言葉を先に言う。彩の表情は険しい。解っているなら止めると言いたげな顔をしていた。悠の担当した事件のレポートを見れば皆同様に彼は異常だと云うだろう。事実、これまで協力にやってきた関係者たちはそう言ってきた。事件に関わる度に何をしているのかと問う連中も多い。しかし笙子はその度に問題はないと言ってきた。

答えは簡単だった。

「彩ちゃんは奏者の仕事が何か言えるかしら」

「当然です。土地神に音を届けてその力を静める。魔の怪物たちを

音によって浄化する」

キーボードから手を離していた。

「合ってる。けどそれだけじゃ足りないわ」

首を傾げる彩。現代の魔術師の傍には必ず協力者がいる。その協力者が同じ魔術師であるかどうかは別だが個人で動く者はいないだろう。関西にいる数百の魔術師たちも皆、笙子と同じように誰かと手を組んでいる。

「あの子はね、他の奏者とは違うのよ。奏者の力は何か知ってる？」

「楽器です。それぞれの持つ楽器により音を奏でて力を具現化する術者ですから」

「悠はギターを使用して音を鳴らす。奏者の仕事はさつき彩ちゃんと言ったとおり、土地神の穢れを浄化することや妖魔の浄化にあるわ。相手の魂が何であれ完全に消滅……つまり浄化することに意義を持つ。いわば鎮魂の音色ね。悠が他の奏者と違うのはその場に残った思念や魂なんかも自分の魂の波長と合わせられるの」

「そんなデータ載ってませんよ」

モニターに表示されている長瀬悠のプロフィールにはやはり書いていなかった。

「載せる必要がないからね。で、靈感……いえ自然と同調する事ができる能力。だから人間の魂さえ観る事ができる」

「その力は知ってます。随分昔にもいたって聞きますよ。特別強い力を持つて生まれる人がいるって……」

「魔術師だけが特別じゃないのよ。魔術師ってほんの僅かな素質があれば誰でもなれるのよ。奏者は違う。先天的な力は産まれたときに決まっちゃうから」

少年の身体と心が傷つきながらも成長していく様を笙子は隣りで見てきた。その瞳にはある男の姿が覆い被さったように悠の姿と酷似している。

「で、その力を持っていたってという人は長瀬律」

一人の男の名前を口にした。

「あの子が危険に身を投じているのは解ってるわ。でも誰かにしろと命令されてやっているわけじゃない。あの子は父親の言葉を守ってるだけよ」

彩が悠のプロフィールを次へと移した。その頁にこれまでの経歴が全て記されている。もちろんその中には笙子が悠を引き取った日付も載っていた。

「悠君には父親はいないはずですよ。保護者は……長瀬律となってますが彼とは血がつながっていません」

「そこよ。血の繋がりなんていらなのよ」

長瀬律は身元引受人であり父親ではない。悠は捨て子、親知らずである。まだ赤ん坊だった頃、ある教会の前に捨てられていた。幸か不幸かその教会はこちら側の世界と繋がりがあり悠は授かった力とともに進む道を決められたのだ。

奏者としての素質がなければどうなっていたか解らない。

「そ、それは笙子さんと同じ……ということでしょうか」

「私の場合は感謝ね。私が高校を卒業するまで大事に育ててくれたことへのね」

彼女もまた同じようにして育った一人である。親がいてもその人に育てられるかは必ずではない。笙子を育てた人物は親ではない。

「悠の大事にしているものはそんなものじゃないわ。もっと根本的な根源にある。つまり魂の浄化。自然への回帰とでも言うのかしらね」

「わたしには解りません」

モニターの中の悠は無表情で冷たい瞳をしていた。

「彩ちゃんも悠のギターを聴けばすぐにわかるわ。どれほどあの子がどういう子かということ。さて慧に連絡しなくちゃね。何所まで来てるのかしら」

再び携帯電話を手にとるとメモリーの中から織戸慧という名前を呼び出す。携帯のメモリーはすでにいっぱいになる手前まで記憶されていた。グループ別に別けられたメモリーのなか慧の名前は長瀬

悠と同じ場所にあった。

第一章六話

悠が膝から下を無くしたあの日からまだ半月ほどしか経っていない。それなのに面倒なことになった。義足の注文は金が掛かった。数少ない奏者を危険に晒し肉体の一部を破損させたことは事務所設立を遠ざけた。時雨という強力な仲間が加わったが彼女も気ままに動く。笙子の目的は指の隙間をすり抜けるように遠退いたのだ。

今回注文した義足は海底に沈んだ物とは全く違う。単なる足の代わりではなく戦闘用のもの。連盟の所有する技術と魔術の結晶。一般家庭で普及しているような代物とは違っている。単なる物体として活動するのではなく、文字通り身体の一部として活動する。身体に装着した時点で痛覚、触覚も働きだす。地を踏めばその感触は脳へと伝わるし、切られれば血は出ないが痛みは感じる。本当に身体の一部として機能を果たす。

そうした義肢を作っているのは笙子と同じ魔術師である。

魔術師の本分は戦闘にあらず。

魔術とは人為的に奇跡、神秘といった非科学を行使することにある。隣りでパソコンを自由気ままに操っているのとは訳が違う。使うものは自然界に存在する力と魔術式。それらを駆使することで火を燃やし風を起こす。時が経っても基本は変わらない。奏者の持っている先天的な力ではなく、ほんの少しの才能と努力である程度のところまではいける。笙子自身がその例である。

そんな中、稀に「正に是」という才能に長けた人物が現れる。イザナギで義肢を製作している魔術師は世界有数の魔術師である。協力者の一人、織戸慧は直接イザナギとは関係ないが京都にある本部と繋がりある家柄から彼やそのほかの魔術師と面識があった。普通ならば世界有数の魔術師と直接会うことなど到底不可能だ。その会う事さえ困難な者達は自分の工房となる事務所の設立を早くに行い独立している。そしてその事務所の場所は内密にされている。

魔術師が方々へ必要な物を新生する場合、自分の所属する団体へ依頼書を送る。団体、笙子の場合イザナギだがそこから今度は連盟本部へと送られる。手間がかかるという意見もあるが古くからそういった仕組みになっているのだから仕方ない。でも時間がかかる事は無く即座に行動に移るため各方面へ連絡が伝わるのは一瞬だ。この辺りは科学万能の時代の進化が全てである。

今やメール、電話、動画、なんでもありとなっている。すでに現代の一般市民はその機器を手足のように使用できる。使い魔に手紙を持たせて走らせるなんて時代錯誤はない。

イザナギへ新しい義足を発注したのは随分前になる。現在、完成した一品は慧が運んでいる最中だ。台風よりも速く走る彼女のバイクに乗せられた物に期待と不安が募るなか電話をかけた。

「おかしいわね、出ないわ」

「運転中なんじゃないですか」

いつまでたっても通話にならない。バイクの運転中なのは知っていた。だがいつもなら路肩に停めてすぐに対応するはずだ。特に笙子からの着信なら呼び出している織戸慧は喜び勇んで受け取るというもの。しかし電話は留守電となってメッセージ録音へと変わる。なにもそこまでするほどでもないと言電話を切ると山の坂道からけたたましいエンジン音が響いてきた。

雨音をかき消す獣のような音は大型バイクのものだとすぐはつきりとする。慧の乗っているバイクとは違う。もっとバイク自体の精度が根本から違う精密機器の骨が鳴らす音。笙子の耳には聞き覚えのない音だった。砂利に足をとられる事もなく登って来たのは赤と黒のカラーで塗装されたバイク。至るところにBMWのマークが入っている。

バイクには黒いヘルメットとライダースーツを着込んだ運転手が乗っていた。その後部には無理やり括りつけた荷物が青いビニールを纏って風に揺れている。バイクは縁側に停まるとなんとか雨から身を防ぐ事が出来た。

「遅くなっただか？」

ヘルメットの奥で黒い瞳が動く。棘のように刺さりそうな目をしている。ヘルメットを脱ぐと肩にさえ掛からないショートのが現れる。また適当に切ったんだろうなと笙子はその形を見て思う。

「早いくらいよ、慧」

「急がせたのは笙子だろ？ まったく夜通しぶっ飛ばしてきたんだ、感謝しろ」

外見とは正反対のぶっきらぼうな言葉使い。男のように話す彼女はライダースーツの胸元部分を開く。随分長い間、走っていたのだろうじんわりと汗をかいていた。バイクの後部にあるブルーシートの箱を縛っていた紐を解いた。

「また新しいバイク……それもBMW……」

「親父からの贈り物だ。オレが買ったんじゃない」

不貞腐れるように言うがバイクは紛れもなく新品そのもの。雨のなかを走っていたため濡れているがまだ新しい部品の数々は光り輝いて眩いばかりだ。一台の車をずっと乗り続けている笙子とは全く正反対で愛車へのこだわりはない。

「それよりも、だ。また倒れたみたいだな。何回目だよ」

「数えてないわってなんで知ってるのよ」

「さっき携帯で見た。そっちの四条が報告したろ」

「そうなの？」と名指しされた彩に向かつて聞くと彼女は首を縦に振った。彼女の報告はインターネット回線によってイザナギへと送られる。イザナギは京都の本部へと報告する。その情報が携帯電話という端末を用いて見る事ができる。

「頼んだものはそれ？」

解き終わるとブルーシートもはがす。差し出された物は木箱。両腕の力をめいっぱいにして持ち上げる。箱を置くと中からごとつと金属音にも似た重厚な音がした。

「あいつ……やっぱり向いてないんだよ。こっちの仕事」

「そんな事言っただけとは悠が心配できたんでしょ。上がった、あ

の子二階にいるわ」

二人で箱を持つ。それでも中身は重く腕が肩から落ちそうになるのを堪える。荷物を持って階段を登る。

「で、あいつは？」

「あいつ……ああ時雨ね。彼女なら定期検診よ」

雲に隠れた太陽によって海月荘は薄暗い。電気をつけて明るさを保っていた。そよ風が吹いているがそれは何時までかわからない。

そのうち、この海月荘を吹き飛ばさん限りの嵐となる。海の波も時期に激しくなっていくだろう。昼間の暑苦しさはすでに消えていた。悠の姿を見た慧が「バカ」とつぶやいた。彼女との仲はもう随分と長いものになった。それなのにこの頃はいつもこんな調子で距離を置いている。

二人は悠の傍に箱を置く。

「でも随分と速かったわね。まさか余ってたやつじゃないでしょうね」

「違うよ、完璧なまでの新品だってさ。なんでも今回の事件で最高に役に立つって豪語してたぜ」

自信満々なその口調は作った魔術師のもの。彼女が言うには義肢製作を行なっている魔術師は頑固なおっさんとのこと。イザナギに所属する魔術師又は関係者の技師をすべて一人で受け持つ職人でもあるが誰も会ったことはないとも笙子は聞いていた。

「おっさんに渡された物だ。間違いなく本物だよ」

箱の蓋を開けると黒い金属の塊が現れる。義足として頼んだ物だった。がその中に在る物は足の形をした金属にしか見えない。さつきまで二人で抱えて持ってきたが重さは二十キロ以上はあった。そんなものを寝ている少年が履けるわけがない。

「重くない？」

「おっさん曰く履いたら重さはゼロになるらしい」

義足は冷たい鋼鉄で出来ていた。笙子が触れる。その触れた場所から身体が凍りつくほどの冷気に晒されるようだった。まるで海に

落とした義足がゴミに感じるほどの精巧さを持っていると知る。特に接続部分には魔力の流れをまるで血管のように繋ぐコードが充満していた。これなら悠の力を最大限に発揮させられる。特に霊に掴まれて海に落ちることはなくなるだろう。それにちよつとくらいの攻撃じゃびくともしない。でもこれだけの品物だと値段が気になるところ。

「金だが試作品だから無償らしい」

「ホント！」

笙子の心配を見透かしたように慧が言った。慧がうなづく。こない物がただなんて今回はついてるわとはしゃぐ。こういう時ほど慧のことをありがたく思うことはない。

「今回の事件だけど」

慧が突然きりだした。腕を組んで窓から外を見ている。窓には大きな姿をした明石海峡大橋がどんと構えている。

「飛び降り？」

慧がうなづく。

「犯人だけど視たぞ。オレならいつでも殺せるけどどうする？」

彩がいつのまにかやって来て慧に茶を渡す。彼女は珈琲を飲まない。家柄なのか洋風の食べ物には手を出さない。茶の香りに受け取った慧は口に含んだ。

「だめよ。あれは悠のためにいるの」

「なんだって悠なんだ？ あんなのバツサリ殺っちまえばいいじゃないか。その後、後ろに隠れてる奴も一刀両断に……なんでもない」

笙子の瞳が慧の言葉を遮っていた。事件の解決という点で言えばこのまま慧が終わらせてしまうのがベスト。何時とも知れぬ悠の回復を待つよりは人が死ななくて良い。見た所、ろくな装備もしていないが刃物のひとつでもあれば事は足りる。それくらいは常備しているだろうからバイクで行ってそのまま大阪へ行ける位だ。

「海の上よ？」

「問題ないさ、泳げるからな」

でもそれは駄目、と瞳で示す。仕事という名目以上に大事な事がある。悠には一人の男が親として接していた。その男はまだ悠の芽は小さなもので開いてはいないという。魔力のない慧と彩には観えていないが今、悠の周りには胎動する力が渦を巻いていた。その光景を見ているのはたった一人笙子だけである。

「実戦の経験が少ないだけよ。それに今回のような妖魔相手には奏者が一番適任なの。それぐらいは解っているでしょ」

慧は黙って肯いた。

「悠や他の奏者が奏でる曲こそ最高の武器になる。私や貴女の剣なんて適わないわ」

今度は窓の方へと歩いていく。まだ海はゆったりと揺れている。そのうち橋は通行止めとなる。

「特に今回は悠の為になるの。だから慧は手出し無用、良いわね」

「わかったよ。俺もただ暇なだけだし、面白そうってだけだったから気にするな」

海を見ながら返答する慧。彼女は魔術師ではない。悠のように能力者でもない。傍にいた四糸彩と何も変わらない。ただの人で他より運動神経が少し良い程度の人間だ。この道を進まなければアスリートになっていただろう。彼女の身体はライダースーツの上からでもはつきりと鍛えられている事が見てとれる。そんな彼女が視たというのは連盟より与えられている専用のゴーグルを使って覗いたにすぎない。霊などの実体を持たないモノを見る事ができるのは限られている。

「でも面白いことを言うわね。いつも面倒だとか何とか言っていて関わることを避ける慧が自分から関わろううなんて」

「なんでもない。ただ暇なんだよ」

頬を赤く染める。暇だ、暇だと口では言ってるが実際はそんなはずはない。今日も台風と共に北上し逸早く駆けつけたのだ。

「それじゃあオレは帰るぞ」

一気に手にした茶を飲みきる。湯飲みを彩さんに返した。私の言

葉に返事はない。

「遊んでいけばいいじゃない。仕事ないんでしょ？ もうじき悠の目も醒めるわ。仕事が終わって一息つくくらいの時間はあるでしょ」

「なにも急ぐ必要なんてない。彼女に仕事はない。笙子の元にやってくる仕事こそが彼女の仕事になるのだから。それにここには海もあれば山もある。観光だけでも暇つぶしにはなる。」

「生憎そんなものに興味がないうえ俺がここにいとあいつが怒るだろ」

それだけ言うと慧は部屋から出て行ってしまった。最後、寝ている悠の髪をなでたのは驚きだった。笙子も同じように悠に触れる。

この子を預けた本人は今頃どこにいるんだろうか。私には何も言わないで消えた彼の行方は現在イザナギと学院で調査してもらっているが不明となっている。もう死んでいるのかもしれない。彼に限ってそれはないだろうけど。学院のパレードで聞いた彼の音楽は私の脳裏に焼きついたまま。強烈なイメージと魂を揺さぶる激しさは忘れられない。最後の言葉もはつきりと覚えている。

「悠は俺より奏者としての能力がある。だからお前の力にもなるさ」彼はまだ幼い悠の事を理解していた。だからこそ私の元に預けたんだ。私はそれに答えるために何事も力で解決するわけにはいかない。少しでも悠のためになるならと事件の解決は悠自身の音楽で終わらせることに意味がある。

「初めて織戸家の方を見ました」

彩さんが言った。古くから続く連盟に織戸の名前は大きく関与している。京都の本部でも織戸家の発言は響く。彼女は産まれた時から定められた人生を歩んでいた。

「あの子も私の仲間よ」

仲間というよりは妹に近いか、とふと思う。あのクールな彼女がその内側を見せるときは仕事の最中ぐらいなもの。バイクのエンジンに命が灯る。爆音をひっさげてバイクは走り出した。

第一章七話

暖かい風を感じて目を醒ます。部屋の中にいることは良く解る。冷たい海の中で途切れた意識はまるで空の上で蘇ったようだった。

窓を叩く雨の音に胸のうちがかき回される。雨音が異常に大きく響いて頭のなかまで叩く様に鳴っていた。

瞼を上げるとぼんやりと天井が見えた。目を動かせば隣の部屋で笙子さんが話をしているのが見える。自分が無事であるということを確認できた。妙な感覚だ、自分の生死を確認するために他の人を捜すなんて。

少年の身体は自由が利かず鉛のように重かった。腕はある。両腕とも健在、目が動くという事は顔も無事だろう。痛みは不思議と感じることはない。なによりあの海で落ちた時、身体の異常はなかったのだ。心と意識が吸い取られそうになった以外に問題はない。ただ、膝より下にあったはずの義足は見当たらなかった。

起き上がろうとすると全身が軋むように痛んだ、はじめて痛覚があるということにほっとした。痛みを感じることで生きていると感じる。だが、すぐそこにある階段のように音が鳴りそうなほど骨からの痛みを受けるとさすがに歯を食いしばる。特に指の先から肘にかけて筋肉が麻痺しているように鈍く感じる。眠っていた頃には感じなかった全身のひびを逐一得る。

しばらくギターを弾くことは出来ないかもしれないと危惧するが指先は悠の意識に従って1分の狂いもなく動いた。

身体の痛みは一旦、諦めて部屋を見渡す。

壁に首を持たれかけているように置かれたギターがケースと共に在る。どすボディをもった相棒は海水に浸かっても尚、その姿を新品同様に保っている。

(なんだ、これ……)

声は出せなかった。心で呟く。悠の瞳に見えた物は黒い塊。彼の

瞳には微かに炎を纏っているように見えた。海の中に落ちたとき履いていた義足とは別物だと一目で確認できた。

痛みに堪えながら腕を伸ばす。ギターに触れると忽ち黒に赤が灯る。真紅のような赤は悠の身体と繋がった証でもある。すると身体の痛みは和らぎ自由が戻る。今度は背を起こして黒い塊に手を伸ばす。触ったとき一瞬だけ痺れる。静電気に似たような痺れが指先から走っていく。その痺れは痛みというよりも衝撃であり苦しみはなかった。

そのショックでさっきまで見ていた夢さえも思い出す。記憶のなかにそれは存在していた。はつきりと憶えている。夢のこともある女のこともすべて。

とにかく黒い塊のような義足を脚にはめなければ立ち上がることも満足に出来ない。足が破壊された半年前からようやく慣れた義足だったがと新しい物を装着する。膝の途切れた部分は皮が綺麗に肉の部分を覆っている。義足が触れるとざらざらとした生の肉が擦れあうような感触を受けた。肉などないというのに義足から生えているコードのようなものが装着部分で接合されていく。そうやって繋がっていくのだ。

次第に黒から肌の色へと変わっていく。繋がった部分にはまるで骨のような継ぎ目と間接が出来上がっていた。それは肌の色をしていて血管もある。外見は本当の脚のようだ。ミミズのような管が刺さるように神経が一体となった。

「起きたようね、悠」

廊下越しに笙子が言った。悠の寝ている部屋は笙子の目から一望できる。襖は開かれています。悠が目覚めと同時に笙子を視界に入れたのと同様に彼女もまた同じようにした。つられて彩も部屋の奥から現れる。「おはよう」とだけ言って足の感触を確かめる。義足はすでに義ではなく真正銘の足となっていた。

相棒のギターも同じく自分の身体の一部となっている。傷んだ所はないか確かめるように一度、弦に触れてみる。確かな音が部屋に

響く。重く耳に響いた。破損箇所はなく濡れていた部分もない。いつも通りの姿をしている。それでも弦の取替えはしなければ駄目だった。ギターを握った手に自身の身体に流れる力の流れを感じる。いつも以上にいい音が鳴らせそうだと確信できている。すぐに弦を外していく。ケースの中に入れている予備から取り出す。笙子たちは部屋から出ずにその様子を見るだけだった。

悠のギターは単なる楽器ではない。奏者と呼ばれる能力者にだけ与えられた紛れもない道具。義足と同じで作った人間は魔術師である。奏者は技術者ではない。調整は出来ても直すことまでは出来ない。壊れていれば今頃、橋の上にいただろう。窓の外では大きな音をたてて雨と風が嵐を作り出していた。

弦の張り替えと共に隣から笙子がやって来る。

「何日くらい寝てたの？」

「二日よ。体調はどう？ もう平気？」

体力は全快ではなかった。痺れは取れても身体に溜まった疲れはまだ残っている。しかし二日という時間の経過が何よりも優先させる必要を作っている。新型の義足のおかげで下半身に負担はない。指が動けばギターは弾ける。あとは自分自身の気持ちだけだ、と力をいれて立ち上がる。

「時雨が電話してきたわ。悠の携帯、海に落ちちゃってね。悪いけど壊れちゃったわ。新しいの用意する」

「いいよ、悪いのは僕だから」

「悪いのが解っているならいいわ」

笑って対応する笙子。彼女は「何かいる？」と聞いた。

「大丈夫だよ。でも…… なにか食べ物でもあれば最高だけど」
腹のあたりをさすると空腹感があつたことに気付く。

「すぐ用意しますね」

笙子の後ろで彩が動いた。隣の部屋では資料が並べられているのが見えた。その資料からさっと離れると階段を降りていく。やはり軋む音は鳴った。

「義足はどんな感じ？ 試作品だつて行つてたけど」

脚を上げる。膝から下の重みはない。まるで地上から浮いているような錯覚さえするほど。あの黒い塊だった時とは大違いである。上機嫌な彼女の言葉。いつもなら掛かった費用や面倒でこんな風を言う事はない。悠はいつもと違うなと感じながらもその性能の良さを伝えた。

「いいよ、これ。馴染む」

義足の感触は前の物より自然につながっている。破壊された脚が蘇ったかのように思えるほどだ。以前のように歩くことも出来るだろう。これなら長時間走り回っても大丈夫だと自信を持って言える。「さつき事件のことについて話していたんだけど」

「僕が意識を無くしている間、被害者は出た？」

部屋の入り口で壁に背を預ける笙子。首を横に振る。誰も事件に巻き込まれていない。この二日間、誰一人として死亡していない。

「犯人は見た？」

「ばつちりと。笙子さんは見えなかった？」

「見えたわよ。もう特定できてるわ」

一枚の紙を差し出す。左上にある写真に悠の目は動く。目の下に隈ができた髪の毛の長い女。細く痩せている人だった。あの海の中で囁いていた女とは肉付きが違うが同じ目をしていた。

「この人で合ってる。名前は……高岡美咲か」

海に引きずりこんだのは誰であろう彼女。しかし彼女が死亡したのは五年前と記載されていた。

「これまでに飛び降りて死んだ人たちのファイル見せてよ。その人たちのことも知っておきたい」

今回の事件、飛び降りで見なされたのは五人。

差し出した紙には高岡美咲のプロフィールが載っている。あの海の中で触れた瞬間、悠のなかには彼女の意識が流れ込んできた。その光景はまだ頭の中で再生できる。五人の被害者が死に至る場面も同じように流れる。

笙子が彩と一緒に見ていた資料の中から被害者のプロフィールを手に取り悠へ渡す。計六人のプロフィールと睨み合いがはじまった。海月荘は台風の中に在る。北上してきた台風は兵庫県全域をその手中に入れ力の限り暴れている。明石海峡大橋は朝から晩まで通行止めとなり船も出る事は出来なくなっている。各地への物資は四国側からに頼るしかなかった。窓には風が何度も叩きつけられ雨が壁に突き刺さりんばかりに振り続けていた。テレビではこの台風の進行スピードが異常なまでに遅いと報告されている。この二日、まるでこの淡路島に根を張るように台風は動かない。

テレビではこの異常気象についてずっと実況されていた。竜巻とも嵐ともつかぬ海の荒れ模様は全ての国民の目を釘付けにしている。「用意が出来ましたよ」

彩が階段の下から声を上げる。二人が降りると居間にはテレビが付けられ四人分の食事が並べられていた。テレビでは気象情報が右下に陣取っている。食事といっても豪華さはない。人数分のおにぎり味噌汁があるだけだった。

「ささつと作れるものっておにぎりくらいしかなくて……後、朝作った味噌汁ですけどいいですか？」

申し訳なさそうな彼女にありがとうと礼を言って座る二人。奥のキッチンから日高が戻ってくると手には梅干と焼き海苔を持っていた。

「まだ病み上がりだろう。あんまり食うとかえって身体に悪いんだ。これぐらいが丁度ええ」

悠はおにぎりを手づかみすると一口。噛めば米の甘味が口に広がる。程よい塩の味。味噌汁も塩辛い胃にやさしい薄味だった。

「これからどうするの」

「食べ終わったらすぐに行く。眠っていた二日の間にあれが現臨しなくて済んだのは幸いだけとおそらくもう時間はないよ。被害者が出ていないってのが理由だ」

「行かつて外は台風だぞ。やめとけ、また海に落ちることになるで」

日高が言ったが悠は義足の部分を見て首を振った。彼はこの二日、期を狙って沈んだ義足の回収を試みていた。しかしこの台風と事件の発生から船を出す事ができなかった。まだ悠の装着していた義足は沈んだままである。

「笙子さんは結界をお願い。あいつでかいよ」

戦闘準備は完璧だった。目標の居場所も掴めている。ここで時間を掛ければ間違いなく大変な事になる。四人のいる居間からは目標が見えている。雨は止まないだろう。だが悠の決心は揺らぐ事はない。

「この義足なら大丈夫。でしょ？」

「ええ。海の上でも地上以上の力で戦えるはずよ」

そう言う笙子も同じようにおにぎりを入る。彼女は焼き海苔で巻いていた。ぱりつと割れる音がする。

「こんな雨の中で弾けるんですか？」

「雨や風なんて関係ないよ。元より音とは違うんだ」

「奏者の鳴らす音っていうのはね、私たち魔術師にしてみれば魔力の結晶に近いのよ。耳に聴こえる音とは違うの」

雨や風は差し支えない。奏者の力がその程度の騒音でどうにかなるものではない。彼らの力は何かで遮られるものではないのだ。音の前にあらゆる自然の遮りは効果を無くしそこに現れるのは色と音。演奏が始まれば奏者の力は何人たりとも犯せぬものとなる。

お茶を飲んで口の中を清める。急ぎすぎる心が抑えられたように思えた。

食べ終わる手前で笙子がテレビのチャンネルを変える。左上に表示されている時刻は五時を過ぎていた。

「人払いは三十分以内に完成させるわ」

「わかった」

まだ味噌汁を飲んでいる笙子だがその言葉に偽りは無い。悠は一度、部屋へ戻りギターを手にする。窓から見える橋にはここへ来た時とは全く違う負の感情が渦巻いて見えた。一階に降りて二ユー

を見る。笙子は何度かチャンネルを変えていたがどれもすぐ近くの橋を映している。録画したものはかりだった。現在、ヘリが飛ぶには風が強すぎる。地上からの撮影も危険だと誰一人近づける者はいなかった。

その映像に必ず映る飛び降りた場所。その下には青い海があつて黒く渦を巻いている。

「それじゃ行つてくるよ」

「ちゃんと帰つてきなさいよ」

笙子は動かない。立ち上がった悠を見てただそれだけ言葉にした。このやりとりももう何度目だろうかと思ひ出を振り返る。悠は息を飲んで一人、山を降りていく。

第一章八話

船乗り場には一台も車がない。雨と風の中、悠は傘も差さずに一人歩いて目的の場所まで進む。台風は強烈な嵐を作り上げていた。それでも少年の足は鉄のように重くがっちりと大地に踏みしめる。一人きり歩く悠の周囲には一人も人間はいない。出港を見送り船は波止場に停まっている。休憩所にさえ人の姿はない。まるで見棄てられた廃屋のように凄惨とした風景が広がるばかりである。同様に周囲の建物からも人の気配が感じ取れない。悠はこの海を目の前にして唯一の存在となった。

海月荘から出て三十分は経っている。誰もいないのは笹子が結界をはったからに過ぎない。彼女は橋を含める周囲約二キロに渡り完全なる空間の拒絶を行なっている。タイムリミットは一時間もない。だがその間はいかなる人物もこの場所を意識する事も出来ず記憶する事も出来ない。人を払うは魔術師の役目である。いかなる超常な能力を持っていたても奏者にこのような事は出来ない。また人間の力においても同じである。強大な権力も魔術の前には意味がない。魔術師としての本領が発揮できる場面だ。

奏者は彼女の手助けなくしてこのような地で戦う事は出来ない。対岸の住宅街は人で溢れかえっている。その目を欺く役目を彼女が果たす。

無人の港は荒れる波と暴風で景色を壊している。フェリー乗り場から進むと漁師達の使うボートが並んでいる。そこへたどり着くと海の底で標的が目を醒ました。浜に着くとその広大さと激動に感動さえ吹き飛ぶ。対岸まで広がる青は黒のように濁り逆巻いていた。砂浜はすでに侵食されていて降ることが出来ない。防波堤の先は崖のようになっていて一歩踏み出せばあっという間にあの世行きだろ。

愛用のギターに手をかける。

深呼吸してゆつくりと弦に触れる。指先に全神経を集中させる。体を通して音が息を吸うように鼓動する。ギターから鳴る音は波を作り出す。確かな衝撃と共に降り注ぐ雨粒を弾いて服を濡らしていた雨さえも消し飛ばす。

眼差しは彼女たち六人を捉えた。

海の上、逆巻く波の上で浮遊する六つの影。悠がやってきた事に反応して浮かび上がったもの。そのうち一つが中心に浮き、まるで星の如く位置を取り悠を見つめていた。

テンポを上げる。次第に音は一つのメロディーラインにそって曲を奏でていく。雨や風の作り出すものとは違った音の波が海の波を宥める。ギター以外に何も無い。だが曲は大きく響き渡る。そして彼女ら六人のもとへ届くなり急激に激しさを増していった。

荒れる海の中、女の思念が浮かび上がっている。海の底にあった思念は自由に上昇していた。六つの影が天に昇るように飛翔する。悠には被害者たちと最初の一人、高岡美咲の顔が見えていた。あの痩せ細った顔ではない。自身らの本来の姿だ。だが白く灰が舞ったように脆いその姿はただ浮かぶばかりでこちらに来る気配はなかった。

まるでオルゴールの回転盤。星の五人はくるりくるりと踊る。誘っているのだ、少年を。

弦に力を込める。音は衝撃となり海面を切り裂いた。衝撃は女に向かつて走る。

「また来てくれたのね、あなたも一緒にいたいんじゃないの？」
女との距離は五百メートル以上、加えてこの暴風。互いに音も声も聴こえるはずはない。しかし悠の音は彼女たちに届き、彼女の声は意識への介入へと至る。あの海の中と変わらない。彼女の声は例え深海百メートルであろうとも変わらず聴こえるだろう。そう例えば橋の上であっても変わらないのだ。

音に魂を込める。音に色が点る。やさしい青色。悠は確固たる意思のもとギターを弾く。彼女の声が届かぬ場所に心はある。他人の

声に負けはしない。自ら命を絶つなんて想像さえ出来ない、と念じる。

「まずは一人目だ！」

瞬時に標的を絞る。まずは周りの五人。その五人はまだ踊るようにしているだけだがそれこそが彼女の力を強めていた。一人目は最初に落ちた人間。力はそれほど強くない。思念の強さはその人物の思いの強さに比例する。もちろん生きている人物でも同じで思いの強さがそのまま強さに変わる。

奏者にとって肉体の強さは関係ない。そして奏者の繰り出す音も思念の一部に変わりは無い。一人目の思念はすでに消えかかっている。おそらくは魂は半分ほど喰われている。

音が走る。海面を走る衝撃で一瞬にして消滅したのだ。あっさりとしたものだった。この世との最後がたったこれだけで終わってしまう。続いて二人目も同じようにして消えた。これが今生最後のお別れというのは切ない。

「なにをするの？ お友達になりたいんじゃないの？」

叫ぶ女。だが悠は手を止めない。

「せつかくできた友達なのよ、やめて」

鳴り止まぬ音について中心の女が飛び込んでくる。その速さはまさに神風。彼女に触れるのは良くないとすかさず飛び退く。義足的能力は人間を圧倒していた。三メートルは飛んでいる。

「なにが友達だふざけるな！」

本望じゃなかったかもしれない。不幸な事故だったかもしれない。だからって他人を巻き込んでいいはずがない。

強く弦を弾く。魂の高鳴りが響き、女以外を吹き飛ばす。さすがに消し去ることは出来なかった。だが動きを止めることくらいはできたようだ。動きを制限され身動きの取れなくなる周りの三人。そこへ一撃、衝撃を飛ばす。丸い筒のような衝撃が飛んでいく。見事飛散させる。

「これで三人目」

「やめてって言ってるでしょうが！」

彼女の叫びを無視して再び高く飛び上がる。刹那、正面には残りの霊が二体。視界に入る。邪魔はいない。ならばとギターを鳴らし同時に消し去った。彼女を取り巻いていた存在は全て消え去った。周囲を浮いていた彼らは誰もが確かな意識をもっていなかった。考えることの出来る霊はただ一体。髪の毛の長い女、高岡美咲の霊以外に他ならない。

さすがに空中で動くことは出来なず彼女の腕が触れる。痛みとともに押し迫ったのは意識だった。彼女の思考が逆流してくる。彼女の死ぬ直前。なぜ死んだのかその感情が雪崩の如く悠の頭にかぶさっていく。

「あんたのこと、可哀想だと思う。けど、だからってやっちゃいけないんだ！　こんなこと」

全てを払いのける。女の力が弱まったような気がしていた。まるで払いのけなくとも彼女は自分から手を離れたような感じ。彼女の意思が消え去る。同時に彼女も悠の身体から離れていく。そして落ちる。足場はない。下降にはその身を飲み込もうとする海があるだけだった。渦を巻き落ちてくるのを待っている。

義足が震える。何も意識していない。膝から下が勝手に体勢を整えると装着する前の黒い姿へと戻った。

「そんな嘘でしょ？　なんで立てるの？」

「これって！」

悠自身も驚愕した。しかしそんな考えは瞬間でしかない。確かに悠の足は、身体は海面に浮いていて義足は逆巻く波さえ寄せつけることもない。蒼い光を放って立っている。

「この義足本当にいい物だ、ありがと」

ここにいない笙子への礼をする。

「君のその脚……邪魔よ」

女が追いかける。しかし悠の見た方向は違った。彼女へ向ける音はない。迫ってくるもう一つへ心向ける。

白い靄。

船でやってきた日、最後の被害者を包んだあの白い靄。白色の巨大な闇が包み込むように迫り来る。義足は悠の意識とは別にあるように勝手に飛び跳ねる。しかしその動きが少年の行動を予測したように可動するのだ。あまりにも無茶苦茶な軌道に白い靄は動きを追えずにいた。

靄の中、白い姿を確かに見た。

赤い眼をしている。大きさは七メートル……いや、それ以上。海面に浮き出た身体だけじゃその底は測れない。

「ようやく出てきたな」

女の霊は一人では何も出来なかった。彼女の心がどうであれそれを実行させることが出来る者がいる。古くから人の心を操り世界に歪みをもたらす者がいる。それを妖魔と言い彼ら奏者によって静められてきた存在。

眼前の敵を見る。視界はこの大きな怪物を捕らえ靄を消す。

「蛇か」

白い体躯をくねらせて海面に現れている。とても大きな瞳は赤く光る。両者の瞳が交差する。互いに敵と認識した瞬間であった。

再び海面に降りて距離を取る。ギターの力を最大限に引き上げる。少年の相棒は全身で掻き鳴らす。今度は全身の力を一点に集中させた。大きな力を纏めるには時間がかかる。二対一だと不利かと見上げれば彼女は空で停まっていた。

呆然とその場で停止している女に大蛇は口を広げて進む。

昔から世界には闇がある。その闇は時に人の世に姿を現し全てを飲み込む。

肉も、骨も、記憶も、魂も、その存在さえも。

妖魔は生物の魂を喰い生きるとされる。彼らの誕生から死に到るまで全て他者の命で生成されているのだ。

飛び込み命を失った者達の魂が希薄だったのはすでに蛇が食った後だったから。悠が消し去ったのは最後の欠片。力をつけた妖魔は

身体を得てこちら側へと現れる。

それを現臨という。

この世に現臨した蛇は今まさに役目を終えた女の魂を喰らい尽くそうとしていた。

「やらせない！」

弦に心を込める。狙うのは蛇だ。一気に力を解放する。音は衝撃波から赤い光と姿を変えて蛇に伸びる。一筋の光が捉えたのは肉体。光の動きはギターで奏でる曲で調節される。光は音が鳴りつづける限り消えることはない。光は消えない。大蛇の身体を光のロープで海へ叩きつける。そこに腕力はいらない。必要なのは音。それも強い意思の籠った音だ。身体の大きさは比にならない。

大蛇は海面へ叩きつけられるとそのまま海へと潜った。光はまだ蛇の身体を縛っている。そのまま釣り上げる。波が強く大きく揺れる。圧倒的なまでの強さだった。だが義足が耐えられず痛みを訴える。悠が足元を見ると脚が浸水していた。

海底からの咆哮。一撃だった。身体は真下からの暴力的な水に押し上げられる。義足は力の限り主の体を守る。

蛇の咆哮は巨大な水の塔を形成しそのてっぺんに押し上げられた。飛び降りる事は出来ない。すでに悠の身体は空にあった。それでも心は強くある。どこにいる、と大蛇を探す。

遅かった。思考が行動へ移る前に大蛇はその体躯を移動させてきた。

身体は塔のてっぺんからさらに上空へと追いやられる。まるで玩具のように浮遊するしかなかった。驚くほどゆっくりとした時間の流れた。雲にさえ手が届くほどに思えた。さらには遙か先にいる地上にいる笹子の姿まで瞳に映った。

浮遊から落下へと変わる。口を開いて待っている大蛇へ落ちる様は傍から見て酷いものだなと感心する。

「イメージは……虹。七色の光の虹だ」

コントロールノブを精一杯に引っ張り一点集中型に変更する。

窮地に関わらず悠は冷静だった。

「光のシャワーだ。受け取れ」

最初は赤。次は青、緑と次々に虹色の光が溢れる。天から降り注ぐ光は次々に蛇を掴まえていく。口を閉じさせてその上に悠が乗る。生身の魂と触れる。妖魔に身体はない。肉体は魂が実体化したもの。触れればその熱さに身を焦がす魂の現象。まるでマグマのように燃える命。だが義足は物ともせず立っていた。

「ここまでくると凄いつていうより卑怯だな。でも、お前にはこれくらいがいいのかもな」

最後の一本。ギターネックより生まれる光は無色透明。雲の上で輝く月が一瞬だけ悠に呼応したように輝く。暗闇を一筋の光が照らした。まるで琥珀色の槍。

黄金色に染まった光が蛇を一刀両断にした。

蛇には叫び声さえ出ない。あげさせない。

引き裂いたその最後、蛇の腹に溜まっていた人間の魂が解放されていく。さつき消した人たちのものだった。その残りが溢れ出す。

彼女、高岡美咲の魂さえもそこにあった。

まだ海は荒れていたが悠の心は穏やかで波紋一つない水面そのものだった。

塔が崩れ悠の身体は海へと落ちていく。落下する中で見た命の光は異常なまでに美しい。海面に降りるが痛みはない。すべて義足が吸い取った。

消える命のなかに彼女の意識が垣間見えた。

「これで本当に最後だ。でもこんどは一人じゃないよ。さようなら」
上昇する先には彼女を待つように五体の霊がいる。地上、淡路島からは六人が見失わないように緑色の川が流れていた。

少しばかり先に逝ってしまったが最後に残った心は彼女と一緒に
行こうとしている。消える瞬間、彼女が涙を流したように見えた。
でも幻影だ。

彼女の姿はいつの間にか消えていたんだ。

してやれるのはここまでだ。

すべての光がなくなる。

雨曝しのなか僕はその後もずっと一人でギターを弾いていた。

第一章九話

かの少年が戦闘を始めてから五分ほど経つ。雨が降りつづける中、一台の車に乗った笙子と彩が少年を見ている。人を避けさせる魔術はすでに発動している。少年の戦いを見られる者は二人以外にいない。対岸の街も少年と嵐の中で揺れる影を認識できない。それは壁を作るわけでもない。人間の意識そのものを背けさせるのだ。術の発動している間、そこに何があるのかなど誰も気にしない。場所が大きすぎるため結界の耐久時間は少ない。持って二十分が限界だろう。しかしその間に悠は戦闘を終わらせると笙子は読んでいた。

戦局はどうだろうか、と悠に目を向ける笙子。

周囲の雑魚を一匹ずつ消している。あれでは時間が掛かるかもしれない。なにより奴の姿が隠れたままだ。死者を弔うことなど後回しで良いというのに。ほんの少しの苛立ちの中、飛び回る悠の姿には圧倒される面も現れる。今回の義足、間違いなく最高級の一品だ。まさか海の上を走れるとは思いもなかった。

「笙子さん」

隣りで双眼鏡を通してみている彩。連盟から与えられている霊視を可能とする眼鏡である。魔術師と知合いだからと言って誰もが霊能力を持っているはずはない。連盟で働く人間の大部分は普通の人である。彼女らが少年と戦う影を見るにはこういった装備に頼る事になる。

「あの飛んでいる彼女、例の高岡美咲さんで正解ですね。写真とそっくりですよ」

高岡美咲。悠を引っ張り上げる際に見た女だった。

今回の事件、一番最初の原因はなんだったのか。その問いの先に彼女がいた。この数週間で起きた自殺が引き金になるには少し時間が早い。妖魔に操られた人物がいるならもっと確かな意思を持った魂が必要になるはず。なのに最初の犠牲者は極めて普通の考えをも

つていた人物でとても自殺するような人物ではなかったと知人、友人からの証言も取れている。この世に絶望も失望もしていなかった。また生活は順風満帆とはいかない物の不幸せではない。そこに妖魔自ら心に介入するのは不自然だ。生きている人間の意識を意図的に操る事はいかに奴等といえど難しい。特にあのような中級の妖魔であれば尚の事。

完全に心が無防備になった者こそが妥当だ。

それが彼女、高岡美咲。

「哀しい人生ですよ。特に最後は……私でも死にたくなりますよ」
双眼鏡越しに観る彼女がつぶやいた。私たちが得た情報は彼女の末路だった。高岡美咲の出身はこの兵庫県淡路市、つまり淡路島の北部となっていて彼女の実家はこの近くに存在している。イザナギの情報はとても早く正確に彼女が死ぬまでの経歴まで綺麗に調べあげていた。

彼女の家は私達の行く先にあつた。

人避けの魔術はその効力が切れるまで仕事を果たす。笙子は車のエンジンを再び点けると無人の道路を走る。

高岡美咲は高校時代まで何不自由なく暮らし、こちら側とは違う普通のまともな人生を送っていた。自殺の原因は神戸の大学に進学した頃。その頃に出会った友人。それが全ての元凶とも言うべき存在となった。

「友人に恵まれなかったのね」

その友人と出会った直後、彼女の運命は激変する。大学二年の夏、彼女は大学を退学処分される。理由は学費の滞納と本人の出席率の低さだ。春頃からはどの講義にも出席していない。その背景には麻薬が隠れていた。昨今、日本でも麻薬は簡単に手に入れることができる。単にそのルートが存在する側にいるかどうかが問題だ。

彼女の場合、友人が線引きとなった。手に入れた麻薬を使用した彼女は日に日に狂っていった。ほんの少しの快楽は彼女の神経を破壊するまで時間は掛からなかった。

最初は遊び感覚だったんだろう。すぐに止められると思ったのだろう。その軽い気持ちで身を滅ぼした。彼女に残った多重債務の額は二百万。親はその金額に驚いたらしい。一人娘が大学に入学した頃の嬉しさなど消え嘆きだけが溢れた。

レポートには記載されている。どうやら薬を購入するのに親からの学費をつぎ込んでいたらしい。中退してからの後も酷い。繰り返し薬物で身体は徐々に内から破壊されていく。精神も病んで入院していたと記載されている。身体が崩れていく前に精神が駄目になったんだろうな。この頃には親は彼女を見離していた。それでも可愛い一人娘だ、何とかしたいと神戸にあった精神病院をあてがっていたのだろう。結局それが彼女の最後を決めてしまった。

「彼女の最後は自殺なんですよね？」

「違うわ」

彼女の最後は自殺と記されている。でもそれは違っている。もし自殺と言う選択を選ぶなら離れたこの場所へやって来ることはない。「彼女のデータに書かれているでしょう。病院から抜け出した彼女は車を奪って走っていたと。そのとき目的の場所があったのよ、おそらくその場所は彼女の実家」

高岡美咲が車を強奪したことは表には出回っていない。精神病患者が病院から抜け出し死亡したなどと世間に知られればどれだけの被害が出るか解らない。病院は隠していた。連盟はその情報をも短時間で聞き出した。

「なぜですか？」

「人間、弱り果てた最後に目指すのは大抵、自分が生まれた場所よ。もしくは育った場所。彼女もそうやって実家を目指した。自殺として断定されたのは彼女の精神状態やブレーキのかけた際の跡がなかったことからでしょうね」

その頃の彼女に自我はほとんどなかったはず。実家に帰ったからってどうなるものでもない。ただそこにあるのは精神の崩壊があつて真っ白な空白となる……それだけだ。どうしようもなくなった時、

人間が向かう先は家だろう。大半の人間は家に暖かみを持ち無償の愛を受けとっている。そこは自分の敵がない最後の砦。

笙子の瞳に映っていたのは無人の道路ではなく荒れ果てた木造の家だった。車の先にそんな物はない。ただの幻想であり彼女の想像でしかない。

「橋から転落したのは偶然でもなんでもない。無理やり運転していたのよ。免許もない彼女が最後の思考で……最悪の状況下で彼女は運転をしていた。そしてあたり前のように海へと落ちたのよ」

巨大な橋の柵はとんでもなく軽いもの。時速百キロ以上で突撃すればひとたまりもない。彼女を乗せた車はそのまま海へと落ちる。レポートには遺体は車と一緒に引き上げられたと書いてある。おそらく最後に残した一人で死にたくないという思念だけがあの場所に留まったわけだ。そしてその思念はやがてあの妖魔に利用され今回の群発自殺を招いた。

「あの五人は何気なく走っていただけ。彼女の声を聞いて突然、死んだって言うことですか」

「そうでしょうね。高岡美咲はもつと漠然とこの橋を走る人たちに向けられていたでしょうね。被害が五人で少ないほうよ」

そう語る笙子の瞳にも妖魔が映った。悠は天高く飛んでいる。なにも心配することはない。あの子の瞳は揺らぐことのない信念と意思を持っているとざわつく心を落ち着かせる。悠を預かるとき男が言っていた。自分を超えることの出来る奏者だと。その素質を持っている大切な子だと。笙子は彼からあの子を任されているのだ、死なせてはならない。だが無様に死を迎える程度なら助けはしないだろう。

それは私自身もそうだ。

「悠君、大丈夫なんですか？ 助けなくていいんですか」

丸い後が付きそうなほどに双眼鏡をくつつけて見ている彩が言った。笙子はいつとすでに瞳にその光景を映しておらず道路へと向けられている。

私はあの子を見てきた。あの程度じゃ死なない。それどころかもう勝っている。光の矛先はすでに蛇を捉えていると肌で感じていた。「信じているんですね」

「ええ、だって私の息子よ」

自信を持って発言する。血の繋がりはなくとも、何所の誰から産まれたか知らないけれど、あの子は自分の息子だ。

見れば光は蛇を穿つ姿が見えた。琥珀色の光はこれまで見てきた奏者全てを超える輝きであった。関西という枠に収まらず全世界でも稀に見る光。

本当に律さえ超えてしまいそうなほど輝いている。でも律は悔しいなんて思わないだろうけど、それはとてもおかしくてうれしい出来事なのだ。

車が停まる。高岡の表札が掲げられた家がある。だが人は住んでいない。無人の屋敷はすでに寂れ雨に晒されていた。高岡美咲が死亡した日からすでに五年が経っていたのだ。車から降りると傘を差す間もなく冷たい雨が全身を濡らした。

振り返れば丁度、悠がいる場所が見えた。事故の現場からもこの場所は見える。空高くに浮遊する彼女はじっとこつちを見つめていた。その瞳の先には私ではなく彼女の家があるだけ。

「ここだなにをするんですか？」

「供養……かな」

笙子が懷より杖を取り出す。といっても宝石や装飾はない真直ぐで細い棒のような物だった。杖を指揮者のタクトのように振るう。すると寂れた家は光を放ち天へと昇っていく。その最中、消え行く彼女の魂を包み込まれていった。

第一章十話

大阪、いつものように電車で揺られて辿り付く帰路。人気のない道を選んで進む悠。淡路島の一件は笙子が後を引継ぎ先に帰ってきたのだ。とはいえ引継ぎといっても事件の犯人たる人物は死亡しており妖魔も悠の音楽によって消滅している。あとは事後処理があるだけだった。そうなれば悠がいてもする事はない。笙子は「遊んでいけば」と声をかけたが無駄だった。嵐が去り船が出港できるようになった途端に乗った。

そして今、自分の部屋となっている質素な空間へと戻ってきた。あの潮騒の香りは当然ない。

生活感のないフローリングの部屋。冷蔵庫の中に入っているビンを取り出す。部屋の隅にまで進むと壁に背を預けてギターをケースから取り出す。あの台風の中でもギターは一切の損傷も錆びもせず身体を保っている。誰もいない無音の空間だった部屋に静かな音が鳴る。

弦は彼ら奏者の力を響かせるパーツ。すぐにギターの手入れに入ろうと予備のパーツを広げた。全ての弦を取り部分ごとに分割する。ボディ部分を丁寧に磨く。このギターの本来の持ち主は現在行方不明で調査中。旅に出た本人が最後に悠へ預けたものである。

黒いボディに光の角度で色が鈍くも明るくもなる特殊な偏光色加工。ボディの右下には赤い色の破線がながれている。破線はネックへと一本の線を残している。まるで生き物のようなこのギターは悠の相棒となっている。

ゆっくりと丹念にボディを磨き上げていく。分解したパーツを組み立てていく。最後に弦を張っていくと再びその姿を取り戻す。もらったこのギターの手入れはこれで終る。なにも特殊なことをするのではなくギターを吹き上げるだけといったほうがいい。もし半壊するような事があれば術者は奏者ではなく専門としている人物の

力が必要となる。

ピンと張った弦を弾くと部屋に心地よい音が響く。力を放つと弦は痛みすぐに新しいものと交換する必要がある。

「やっぱり悠の作る音は素敵だね」

擦れた声がする。かすかに女性の物だとわかる程度のもの。振り向けば窓辺に夜風と一緒に彼女がそこにいた。

「ちゃんとドアから入ってこいよ」

悠はそんな彼女に目もくれずドアを指さす。

美しい銀色の髪にこれまた整った顔。背は百八十センチはあろうかという長身の女。悠と並ぶとまるで子供と大人。彼女こそ笹塚笙子の事務所立ち上げに奮闘する最後の一人である。名を時雨という。面倒なんだから

「ここは三階だよ」

「関係ないわ」

まるでどうということはない。地上三階であろうとも彼女は軽く飛びやってくる。だがこれは彼等二人の日常であった。時雨はドアから出入りせず開けっ放しの窓からやってくる。半年前の一件以来、彼女は悠にべったりとなっていた。

「検査、どうだった？」

「退屈だったわ。何時もと同じように薬と身体の検査ばかり、それより悠はどうだった？」

「どうって？」

「淡路島に行ったんでしょ。お土産とかないの」

手を差し出す。白い掌が下を向く悠の目に映った。何かよこせと言いたげなその動きにも悠は動じない。するとそのまま身体を摺り寄せる。

「ないよ」

時雨は身体をぴったりと合わせると視線は足へと動いた。眉間に皺を寄せるようにして覗く。

「足……変わった？」

悠が頷くと手をあてがった。一心同体と化した義足から時雨の温もりが伝わる。荷ねくんよりも僅かに熱い体温だった。

「向こうでさ、前の奴落としちゃったんだ。でもいいでしょ、これ」

「波長が合うみたいね」

摩るように義足の部分をさわる。義足を通して時雨の力が流れ込む。

「どうしたんだよ」

いつもとは違う彼女の仕草に戸惑う。彼女の身体が密着する。背中に暖かみを感じる。

無機質でしんと静まり返った部屋に人の触れ合いで火が灯る。

「寂しかったんだ。音、聴かせて」

時雨の身体は継ぎ接ぎでできている。服の下からその継ぎ目がほんの少し透けて見える。胸は平べったく背中には彼女の純粋な温もりだけが伝わっていた。

僕はそのぬくもりの中でギターを鳴らすことにした。

第二章一話

神戸の山間。まるで永遠に凸凹の続くような土地。あまりにも不釣合いな一本の線が天へ向かって立っていた。地上から少し首を上げればその塔を見ることはできた。たった一棟、山の天辺からそびえ立つ。

近代、特にこの2000年以降、都市部ではその街のシンボルとして背を高くした建造物が増えた。増加する人間を収容するための施設とはいえ数は多く自然を破壊して作られた。その時代の流れかすでに人の住む場所さえも空へ向かって高くある。人々はその巨大な建造物に恐れを抱くどころか自らの業の素晴らしさを誇るようになった。

関西、兵庫県は土地の安定が非常に厳しく瀬戸内海に近い都市部は山に囲まれるようになっていく。海岸の華やかさに比べ山は多く巨大である。主要都市から離れればすぐに山が出現し行く手を阻もうとされる。ここが日本であるため仕方ない事だが不便この上ない。住民はその山を削り取り作られた住宅街に住むほどだ。

そのような立地に関わらずこの真白き塔はそびえ立っている。根をはったのは他に較べると平地のように削られた山。その肌の殆どは高速道路のため削られていた。地上五十五階建ての建造物にはあまりにも不都合だった。だがこの場所に建てた人物はここでいいと言い張った。

まるで塔の如き出で立ちである。日本全国を捜してもここ以上に高い場所は滅多にないだろう。数キロ離れた都市からでも周囲の山よりも高いその塔は確認できる。

塔の名前は『神戸言霊学園』という。そして塔の中身はマンションである。

建てたのは日本人ではない。少し昔、この土地を買収したドイツの会社がある。その社長であるセルマ・フォースターという大金持

ちがいた。自分たちが日本へ移住する際に必要だと主張し、たった一年程度で建ててしまったのだ。

建造主であるセルマ・フォースターは自分達の意志だけで工事を進めた。マンションとして建造されたのにも関わらず日本人……いや他人のために用意した部屋はなかった。入居者は全て、彼女の知人とされ部屋を借りる事も購入する事もできない状況であった。所有者の意向なら仕方がないこと。それぐらいは理解できるが他にも地域住民からの苦情や風景を壊されたなど反発もあった。

その全てを受け取ったのは関西魔術連盟であった。このマンションは彼らにとつても必要なものであったのだ。事態を收拾するには時間が掛かったが程なくして騒ぎは消えた。今ではまるでシンボルの一つとしてその姿を見せている。

マンションには当然、住民達がいる。セルマ・フォースターが言う知人達だ。だが以前より日本に住んでいた者はごく僅かである。完成後、どつと移住してきたのだ。親のいない子供たちが、彼女と一緒に何十人も一斉に。

一階あたり二十室から三十室とあり、そのどれもが3LDK以上という空間を保有している。子供達が住むにはあまりにも贅沢なものだ。防犯システムも最先端の物を導入しており目の肥えた高額所得者さえ満足する内容である。もちろんこのような建造物がメディアによって報じられないなどと言う事はない。建造開始頃からずっとマスメディアの目に晒されていた。

当然のようにテレビ、新聞、ネットといった媒体を通し情報が流れた。それを見てここへ入居を願った者たちが殺到していたとも報じられていた。だが建てたセルマはそれを鼻で笑うように拒否した。最上階の一室。窓から覗けば遠くに瀬戸内海が見える。元より都市が位置する場所よりも高い場所に立っているのだから当然だ。夜になれば海岸を輝かせるイルミネーションが見える部屋。見下ろせば遙か下、意識が揺らぐほどの高さを思い知らされる。それがこの場所がまるで別世界にいるように思わせる。平行に景色を観ると一

面の青。

まるでここは雲の上のよう。

しかしながらこの素晴らしい景観に一切の興味を示さないのがこのマンションの住民たちだ。彼らには景色など見えていない。窓から見えるその全てがどうでもよく写る。それはこの部屋でカタカタとキーボードを押しつづける男にも同じだった。もう彼此半年近くになる。一日の殆どをパソコンの前で過ごしていた。部屋を出ることはなく食事はインターネットによる通信販売で届くものかデリバリーばかり。運動などまったくしない。一日に歩く歩数は百歩以内、不健康極まりないこの生活を送ってきた。それでも身体能力にそれほど衰えはなく脂肪もついていない。元々、痩せ細っていたため少し肉がついて程よい感じになっただけである。

部屋の中はシンプルといえば聞こえはいいが言い替えば殺風景である。パソコンの十五インチモニターによる光以外はなく広い部屋の端にベッドがあるだけで生活観はまるでない。フローリングの床は痛みも埃もなく出来たばかりの頃と何一つ変わらない。部屋を遮るドアの隙間からも光が漏れてくることはない。どれだけ広い空間を持っても彼はこの部屋で一人きりなのだ。

この半年、部屋を訪ねてくるのは限られている。その一人がやってきた。

「お父様、お呼びでしょうか？」

それは突如のこと。美女が現われる。部屋のドアは閉まったままだ。美女は腕はおろか指さえ動かしていない。もちろん彼はパソコンの前から動いていないためドアに近づいていない。だが驚く事はなかった。突如として現われた美女に一切の挙動なしに話をはじめた。

「ええ、時間はぴったりですね。良い事ですよ、氷室」

彼の見ている物はモニターの右下に映っていたデジタル時計だった。

氷室と呼ばれた美女はにっこりと微笑む。彼女の声は凜としてい

て清々しい。自信に満ち溢れている。キーボードを押すことをやめるとモニターへ向けていた身体を彼女のほうへ向ける。彼は壁に手を伸ばし電気をつけた。部屋にぼんやりと琥珀色の光が点る。

氷室の姿は実に痴美で誘惑的である。肩より少し長い赤い髪はふんわりとしたウェーブがかかっている。名前とは違い青い瞳があった。彼女は薄い青の制服を着ている。制服はシャツワンピースタイプでネクタイはない。このマンションに住む住民の九割がこの制服に袖を通してしている。だぼったさはなく彼女のくびれも豊満な胸も良く見える。日本人離れした彼女は名前こそ日本人のものだが姿は別の国であった。

「当然ですわ。遅れるはずありませんもの」

胸の辺りに手を当てて話す。おっとりとしながらも気品溢れる口元と仕草から彼女の育ちの良さが見える。

対してパソコンを弄っていた彼は同じように動くがどこか歪である。ゆっくりと動いているというよりは動かすのに時間が掛かると言うべきか。言うならば人間らしくない。そんな彼は白衣を着ている。部屋と同じ色の白い染みのない一品だ。そればかりか所持しているシャツ全てが城で統一されていた。上半身は彼の白髪と合わせりほぼ白であった。その髪から覗く瞳の黒はまるで闇の中に誘うように動く。

その闇を和らげるのは眼鏡。黒のフレームで作られていた。中心の瞳との壁を作っているガラスが膜の代りをしているように黒を濁す。

「氷室にお遣いを頼みたくてね。行ってくれるかい」

立ち上がり美女の頬へ細い手を重ねた。やはり彼の行動は少し遅れたように動く。ひんやりとした手と薄い皮の触感が美女の心に触れる。氷室はその手に自分の手を重ねた。

「もちろんでございます。氷室はお父様の言うことなら全て聞きいれ実行しますわ」

彼女にとって当然の返事であった。これまでと一緒に、ずっとそう

してきたようにこれからもそうであるように彼女は口にする。

「しかしながら」

氷室が口にした。自分から発言する事は滅多にないというのに彼女は口を開いた。

「なんででしょう？」

胸の前にあつた手を下ろす。

「このような時期に私が動くということは……やはりお姉さまの件なのでございましょう？」

「察しが良いですね」

男は口角を上げて微笑む。それとは逆に氷室は俯く。

「ですが私はお姉さまの対であり敵に成りえませんがなぜ私なのですか」

彼女にはお遣いの意味するものが解っていた。この後、自分に課せられる使命も。だが自分の力がどの程度かということも知っている。だから理解できないでいるのだ。困惑は思考を鈍らせる。男は告げた。

「それなら大丈夫ですよ。あの子はもう、すでに私の娘でも氷室の姉でもないのですよ。私はその彼女の元から、かの少年を連れて来て欲しいのです」

「それは……それは少し哀しいですわね」

触れた手に頬擦りしながら氷室がつぶやく。ここにいない姉を想う。瞼を閉じて男の肌に全てを預けるようにする。しかしその口元は緩んでいてまるで善かったと口に出すものとは逆を示しているようにもあつた。男はそのことを解っていた。解っていて髪を撫でる。「それでは行つてきますわね、お父様」

頬を離しそつと口づけを交わす。美女の熱い吐息が微かに男に触れる。雄を誘う雌のの匂いがした。唇は芳醇な果実のように絞れば赤く弾けるだろう。今すぐにでも奪いたくなるその一息に男は微動だにしなかった。唇が離れた瞬間、氷室の姿が消えてしまう。残ったのはあの男を魅了する肉体から伝わってくる甘美な香りだけであ

った。

「頼みましたよ、氷室」

一人残った部屋で呟いてみる。静けさの戻った部屋ではパソコンの静かな音がするだけで他には何も無い。再び机に戻ろうとすると入れ替わるようにドアを叩く音がする。男はその音に向かう事はなかった。二度、三度とドアが叩かれようやく鍵が開く音へと変わる。「ちよつと聴こえてんでしょ！ 出なさいよ、夾」

さっきまでの雰囲気全て消し去るやかましい声だった。

「セルマ、静かにしなさい」

金髪のロングヘアがよく揺れる。ついでに着ている白と金のドレスもよく揺れていた。夾と呼びセルマと呼ばれた彼女は男から見てもまだ幼くあった。さっきまでいた氷室に比べると少し年上だろうか。そんな彼女はひらひらのドレスを着てよく跳ねる。彼女こそこのマンシヨンの建造主である。

「あんたねえ、ここの部屋を誰が貸してると思ってたんのよ」

「君だったね。感謝してるよ」

「ええ、そうよ。存分に感謝しなさい」

自己主張の少ない胸を張る。背丈もあまりない。まるで洋風人形のようなのである。

「で、なんの用ですか？」

男の問いに部屋を誰かを捜すようにきょろきょろと見る。しかしここは白い壁に包まれただけの部屋。男以外に誰もいない。セルマは鼻を一息鳴らすと眉毛を上げた。

「氷室に行動させたの？」

部屋にはさっきの匂いが残っていた。同じ女ならその匂いに気付く。とくに彼女ならよく解る。男は声なく頷いて見せた。

「私の子供達じゃ不満ってわけ？」

「そういうわけでは在りません。私の個人的な用ですからね。セルマに力を借りなくともこの程度……」

「わかったわ、でもあの子失敗するわよ」

ふふつと笑うだけだった。ここを出て行くとき氷室は口づけはいつもより熱かった。その熱さを思い出すだけで心は高揚する。

「失敗したら君に頼むよ」

「そうするのが利口ですよ。白河先生」

自分の言いたい事を告げるとまるで嵐のように彼女は去っていった。セルマの騒がしさに白河夾は心を乱さず一人、机と戻っていく。彼のなかに入っては消える彼女たちに自身の意を持ちあわせていなかった。

第二章二話

季節は巡り赤く燃えるような秋。猛暑は過ぎ去り少しひんやりとした風が肌をなぞる。窓を全開にして自然の風を身に受ける。八月、九月の熱くゆるやかな日々突然の終止符を打ったのは何者でもない、彼等全体の行動を管理する関西魔術連盟である。連盟と称されるこの組織は笙子や他の魔術師たちが在籍する巨大な組織であり滋賀から岡山までを範囲としている。その本部は京都にありその他県の関西地方組織を纏め上げる巨大組織である。同様に関東、北陸、中国……と地方によって統括する連盟が存在する。関西魔術連盟は日本の誇るもつとも古い組織である。

連盟は各県にある地方組織への仕事を斡旋する。魔術師や奏者の大半は連盟ではなく地方組織に所属している。笹塚笙子や長瀬悠も同じである。彼らの所属している組織イザナギは兵庫県南部、神戸から淡路島にかけてを取り締まっている。所属する者達の住む部屋から仕事まで全ての政を行なっている。

夏の淡路島で起きた一件以来、卒業してやってきた新人たちへ仕事が回された結果、大きな事件とめぐり合う事はなかった。かの少年こと長瀬悠は奏者としての力を限界まで使うことはなくいつものように作曲を行い一人、連盟より課せられている奏者の使命を果たしていた。

奏者の使命は妖魔の浄化だけに留まらない。各地に向かいその場所に溜まった穢れを浄化する。穢れとは生物の死や人間の負の感情が溜まると現れる汚れのような物。その穢れが一箇所に溜まるというずれは妖魔と化す。とくに人間の死亡は強く濁って溜まるのだ。夏の一件がそうであったように。

大きな力を必要とせず戦闘になることもない。ただ一人で現地に赴き音を奏でる。もちろんただの音ではない。彼らの力が湧き出る奏者としての力。色と思いの募りが溢れる。

そんなゆつくりとした時間が流れていた。

いつものようにギターを抱え作曲に勤しむ悠の所へやってきたのはスーツに身を包んだ橘さやかだった。彼女は玄関で呼び鈴を鳴らすこと五回。いつものように笙子がやってきたのではないと知ったのはそのときだった。悠の身体には足がない。膝から下が消滅している。立ち上がるには夏に起きた明石海峡大橋での戦いで貰った義足をはめるしかない。こういう時、傍にいる時雨が玄関まで向かえばいいが生憎、今は眠りに着いていた。起きる気配のない時雨に溜め息をついて義足を装着して出迎えた。

一方、橘さやかは冷静であつた。五回のベル鳴らしで痺れを切らすかと思いきや部屋の住民が出てくるのを平気な顔で待っていた。関西魔術連盟の特派員である彼女は他と違う役目を担っている。彼女の家は代々連盟本部の協力を行なってきた名家である。小さな頃から魔術師たちと過ごし超常を学びこれまで何百という彼等の試験官を務めてきた。

橘さやかが行ってくる理由は一つである。特派員の中でもっとも特殊な任務を行なう試験官が彼女。

「誰？」

初めて会う彼女を出迎えた悠は聞いた。少し冷たい言い方だった。感情を表に出していない言葉だった。だがさやかは何一つ表情を変えずに礼をして自分の素性を紹介する。

「私は連盟本部より参りました、橘さやか。長瀬悠くんね、あなたに試験に関する事柄を伝えに来ました」

このことを伝えればどんな魔術師も能力者も皆同じ表情をしたものだ。どれだけ冷静を装っていてもそれは変わらないはずだった。しかし長瀬悠はそうではなかった。少年は「入って」と静かに言っ

て彼女を招き入れるだけだった。

先に表情を変えたのはさやかのほうだった。レポートで彼に関する情報は全て知っている。膝から下、色の違いで見える義足に心は負けた。

長瀬悠の両足は春先の一件で消滅している。どれだけ苦しんだだろう。義足に慣れるまでの時間はどれだけかかっただろうか。十五の少年にとってあまりにも酷い仕打ちだったと心が負けて表情が歪んだ。その顔は誰も見ることはなかった。

「時雨さん寝てるのね」

「今日はずっと寝てるよ」

足を奪った人物はタオルケットとベッドに身体を預けている。悠は時雨を伴って二人して行動していることが多い。時雨は悠にべったりだった。

自分の時間というものが存在しないかのようにいつも悠の傍にいた。彼女は関西魔術連盟の定期検診日以外はずっと悠と一緒に行動している。眠る時もご飯のときも。仕事に赴く彼の隣りで当然のように立っていた。今眠っている彼女はまるで銀色の髪を纏った狼のように。獣じみた野性的な艶をしている。彼女も時折、ふといなくなることがある。風のように現れてまた消える。いなくなったかと思えばまた現れる。そんな彼女に悠は何一つ言わなかった。二人の関係はそうであった。

「机とか座布団……だっけ、そういうのないんですけどいいですか？」

まだ日本へやってきて一年程度、言葉こそ話せるものの悠は所々に解らない部分があった。「構わないわ」と言って二人ともフロアリングの床に腰をおろす。すると早速とばかりに彼女はバッグの中から白い封筒に包まれた手紙を取り出して渡す。封を切り中身を取り出すと目を通す間もなくさやかが口を開いた。

「試験に関して聞く事はある？」

手紙には連盟の本部より認定試験のお知らせとあり日時、場所が記載されている。

「笙子さんは知ってるんですか」

「ええ、笙子には私のほうから連絡済よ。とても喜んでたわ」

突然の訪問で現れる来客たち。その中でもっとも頻度の高い保護者である笹塚笙子はこの一ヶ月とんと姿を見せていない。「また新

人研修の仕事？」「そうよ、嫌になっちゃうわ」と愚痴を溢していたのを憶えていた。

笙子のほうはというと悠とは違い雑な仕事をこなす日々が続いていた。奏者は定期的に仕事を行なうが魔術師はそうはいかない。彼らの本分は人助けや世の中への奉仕ではない。魔術は個人が願望や欲望をかなえる手段の一つでしかない。この卒業生が溢れてからの二ヶ月、彼らの先輩として同行することで仕事を得ていた。だから試験当日も来れないだろう。

「十月十日、京都の本部にて試験決行か」

紙に書かれた試験の日程。その下には試験官の名前が書かれていた。橘さやか、今日の前にいる彼女である。

「試験の内容は載ってないの？」と聴くと「土地神の鎮め儀式」と言った。

奏者の使命は妖魔の浄化だけに留まらない。各地に向かいその場所に溜まった穢れを浄化する。穢れとは生物の死や人間の負の感情が溜まると現れる汚れのような物。その穢れが一箇所に溜まるというずれは妖魔と化す。とくに人間の死亡は強く濁って溜まるのだ。夏の一件がそうであったように。

彼女の言った鎮めというのは言わば奉仕に当たる。

京都に限らず日本は上から下まで山がずっと続く。動物達が住み命を育む大地と水の合わさる場所。長い時間の経過によって神が宿る事がある。古くまだ人類の文明が発達する以前より彼らは存在していた。ある時は獣の姿として現れ、またある時は同じ人間の姿をして存在した。

関西魔術連盟の大役目は彼ら神の魂を護る事である。日本には実に大小様々な一万八千にも数えられる山が存在している。神も大小様々で獣の化身としても現れた。それは妖魔や妖怪といった化物の類とは一線を隔した存在でもある。力の差は歴然であり人知を遥かに凌ぐ。

神の出現は稀であり現代において新たな髪の出現は見られない。

山の中を流れる河を始めとする一点において生物の魂が集中的に集まる事がある。集合した魂は長年培われた土地から離れることがない。純粋な魂が数千、数万、数億と集まってひとつになる。

それはとても大切なこと。

それはとても純粋なこと。

ひとつの魂となったものは土地を守護するものとして宿る。その魂は形を作り土地神と呼ばれるようになる。土地神は自分の土地にやって来る侵略者を外敵として排除する。昔であれば狩猟にやってきた人間を襲うこともあった。もちろん土地の生態系を守るために人間を襲うことは目的ではない。彼らは自分達から姿を見せるような真似はしなかった。姿を見せることなく自然を操り圧倒したのだ。だが時代の流れと科学の進歩に土地神の力は及ぶことはなかった。どれだけ力の在る者だとしてもそれ以上に人間の願望や驚異的な力の前に彼らの力は意味を成さない。山は削られ岩肌が現れる。そこにコンクリートの道を敷き人は車を走らせた。また趣味で登山を楽しむため昔より山に入る人間が増えた。生態系は崩れ生き物の住処は奪われる。

そんな状況下に置かれて何もしないはずはなかった。

工事の邪魔や、訪れる人を殺すといった呪いのような現象が起こしたのだ。彼らは自分の土地を守るためになんでもやった。それが己に与えられた使命なのだと確信して。

人間も土地神の気を落ち着かせるためにと様々な方法を連盟は試してきた。人身御供、お祓いと様々な儀式を用いた。結果、古き連盟に属した者達によつて土地神との交流ははじまった。土地神の心を静め山の生命を守るため奏者をはじめとする能力者は全力を尽くしたのだ。

今では奏者が定期的に音を届ける事によつて被害はなくなった。また彼らの住処も守られてきた。奏者の力は彼ら神々の穢れを払うことができるのだ。

「京都本部ってことは」

「ええ、きみの鎮める相手は荒神様。京都本部が最高位として位置付ける土地神よ」

まだ目にした事はなかった。さやかの言う荒神様という土地神。鎮めの儀式は戦闘になることはない。だが一度、音が奏でられると体内に存在する穢れによって暴走する事がある。身体の苦しみにとつしようもなく暴れるのだ。穢れの浄化には痛みがつき物である。つまり最高位の土地神を目の前にして戦闘一歩手前にあるわけだ。

「どう？　できる」

「やるさ」

恐れなどなかった。悠はあいも変わらず告げた。冷やかな反応を繰り返す少年をさやかは頭に叩き入れたレポートと照らし合わせていた。すでに試験は始まっているのだ。試験の場所と日時を伝えるなら携帯電話で事は足りる。しかし彼女は態々、京都からやってきた。これは面接でもある。

どれだけ強大な力を持っていても連盟より認定を受けていない魔術師は正式な一員とは呼べない。所詮、地方組織に所属する一魔術師でしかないのだ。認定がなければ個人で事務所を開く事が出来ない。自由に行動する事も出来ないと非常に困った状況となる。仕事も自由にえり好みできず結局は組織に厄介になるしかない。今の笙子がその例である。満足いく仕事はなく新人教育のために時間を取られる日々。仕事上、好敵手となる彼等の育成に手を貸す羽目になる。

現在、笹塚笙子は夏の一件で株を上げている。事件に関与してから被害者は一人で済み連盟にとって一人の奏者を導いた。結果、悠のもとへ使者がやってきた。

魔術師が独立、事務所の設立をするには以下の条件を必要とする。連盟にとってなくてはならない人物だと証明すること。これは魔術師自身が認定を受ければ済む。笙子に到っては日本へやってきた時、すでに認定されていた。それは早急に跡取りの欲しかった泰然長治の仕業である。彼は苗字こそ違えど彼女の実父である。

二つ目は個人ではなく魔術師以外の仲間がいること。そしてその仲間のうち認定を受けた人物が二名以上であることとされる。この夏、義足を届けた織戸慧だけが彼女の仲間で唯一の人物であった。長瀬悠は未だ連盟から認定されていない。奏者に求められる能力に彼は達していなかった。春先に起きた事件で足を無くしたため認定は不可能とまで言われていたくらいである。だが夏の一件でその考えは改められた。特派員、四条彩のレポートが物語っている。

三つ目、最後は二年以上の活動期間があることとされる。だが過去に二年以内に事務所設立を行なった人物は山ほどいる。この三つの条件は現代において殆ど関係はなくなっている。魔術師たちの間ではこの二年間というのの一つの目安であり事務所設立が可能かどうかの期間とも噂されているほどでもし二年以内にできなければ望みが薄いと言われるようになっていた。

「……女の匂いがする」

傍で時雨が呟いた。ゆっくりと瞼を開いて辺りを見る。さやかと悠は彼女のほうを向いて動向をうかがう。時雨は身体を起こすと悠へと倒れこむように寄り添った。まるでさやかへ自分達を見せ付けるようでもあったが時雨が意図するようなことはなんとも思わなかった。

「何の話してたの？」

「認定試験のことだよ」

「それって嬉しいの？」

寝ぼけているのか囁くような問いかけ。さやかの見抜けない悠の心を彼女はわかっていた。悠の言葉や表情ではなく心臓の鼓動で彼の気持ちが昂ぶっていると知った。表情にこそ変わりはないものの悠は少なからず喜びにあったのだ。

笹塚笙子が日本へ帰ってきてもうじき二年が経つ。悠のもとへやってきた試験の手紙は一つのチャンスでもあった。また悠にとってもこの試験はチャンスでもあった。日本へやってきてからというもの生活の全てに笙子の補佐がなければ成り立たなかった。言葉は話

せるが十五の少年が一人暮らしをするには少し面倒が多い。笙子がたまにやってきて与える食事がなければこの歳にして健康に害が出ていただろう。

何より恩を返したいと願ってここにいる。イギリスで一人きりになるところを彼女は日本へ招待してくれたのだから。

まだ認定のない悠が奏者として活動し時雨が自由に活動できることも笙子の存在あつてのこと。彼女の実父である泰然長治がいるからであつた。彼こそがイザナギの当主である。泰然長治は特例として彼らの行動に制限を設けなかったのだ。

山の風景が赤く染まるこの時期に連盟は長瀬悠の試験を執り行う事を決めた。笹塚笙子による試験の陳情とイザナギからの報告で急かれてもいた。遅いくらいだったのだ。

試験を受けるには一定の基準をクリアしなくてはならない。悠は能力は日本へ来た頃にはクリアしていたが実戦経験が少くなくこれまで試験を受ける事が出来なかった。加えて足の欠損でストンプがかかっていった。だが淡路島での事件報告を受けた連盟は試験に踏み切った。

悠に与えられた課題は土地神の清めであつた。

「よかった……悠がそうなら私も嬉しいわ」

特に答えなかった。二人の関係は見てとれる。今は問題ない。このことも後に提出するレポートに記載する必要があつた。イザナギの泰然長治による特例で認められているが彼女は人外である。この部屋に人間は二人だけ。彼女は継接ぎで作られた物にすぎない。前回の定期検診でもまた健康状態はよかった。精神状態も安定。また連盟から与えた任務も抜群の能力でこなしている。問題はない。

「十月十日、また来ます。京都へは私が送りますので当日は用意して待っていてください」

「わかった」

橘さやかは立ち上がる。玄関まで歩くなか悠は追いかけてなかった。時雨がべったりとひつついて身動きが取れなかったのだ。最後に一

礼して部屋を出ると空を仰いだ。

久しぶりに面白い少年に会ったと彼女は思う。冷静な顔を崩さないが内に秘めた想いは伝わった。そればかりか時雨という人外に對しての接し方。やや行きすぎではあるが二人の關係が強いのだろう。十月十日の試験が待ち遠しくなっていた。

第二章三話

広がる大地を駆け抜ける。早朝六時にも関わらず橘さやかは長瀬悠の部屋にやってきた。すでに出発の準備は完了していた。準備といても相変わらず持ち物はギターと手荷物くらいなものでその質素さにさやかは驚いたくらいだった。

「試験はすぐ終わると思いますが二日はかかりますよ」その事を告げてもしのなら「替えの服は適当に捜して買っよ」と興味なく言った。レポートにあった通りだった。長瀬悠は自分の身の回りの物に無頓着であった。

そればかりか「私も行っていい?」という時雨の発言から試験の最中は静かにしている事と言うと悠に抱きつき車に飛び乗った。かくして三名を乗せた車は朝陽の昇る中を走李出した。

高速道路から山道に入ると稲畑が一面に広がった。朝早くから仕事に来ていた農家とすれ違うたびにさやかは挨拶をされる。誰もがさやかを笑顔で迎えていた。目的の山へ着いた頃にはすでに太陽は頭上高くにあり大地を暖かく照らしていた。

「この先、道は険しくなります。もうすぐですよ」

車はすでに道に散らばった砂利でがりがりと言を立てていた。岩肌を削り取るように坂道を登っていく。目指している場所は到底、人の進むような場所ではなかった。見える景色は美しい緑の山だったが走っている場所は土煙りを立てる険しい峠である。目的の山には作られた道路がいくつも流れている。その全てから離れてさやかの運転する車は茂みの中へと侵入した。周囲からは全く見えなくなり十分。無造作に切り取られ開かれた一角へと出た。

「着いたわ」

車が一台駐車できる程度の場所だった。ハンドルを切って方向を変えるので精一杯の広さしかない。悠はギターケースを持って外へ出る。同じく時雨も外へ出たが彼女の腕は自然であり何一つ持った

いなかった。まだ季節的にも早いロングコートを着ているくらいだった。程なくして悠の目はある方向へと吸い寄せられる。

「あの奥？」

その視線の先には洞穴があった。茂みの続きで入り口は半分以上見えなかったがその中から溢れ出る冷たい風の流が伝わってくる。

「そうよ。ここは山の内側へ通じる水脈の入り口なの。荒神様もその水脈の中で暮らしてるわ」

「もし人が入ってきたらどうするの？」

登って来た道の入り口は立ち入り禁止の看板があった。「熊が出現する」「野犬がいる」などの看板を立てていた。だがそれが全ての人に伝わるかどうかは解らない。遊び半分でやって来る者もいるだろう。特に道にはタイヤ跡が残っているのだ。

「荒神様は誰にでも見えるわけじゃないわ。見せる相手は選ぶのよ」
「僕の目には？」

「見えるでしょ、君にはなんだって」

悠は答えなかった。

「さ、時間よ。悠君、試験を開始します」

さやかは腕の時計を見て言った。すでに時間は9時30分となっている。悠は時雨に「行ってくるよ」と言っただけで入っている洞穴へと一人進んでいった。追いかけてよとした時雨をさやかは止めた。

「試験は奏者と土地神の一对一で行なわれます。なにか危機的状況にでも陥らない限りは手出し無用です」

無言で振り向く時雨の顔は冷たく見えた。その内側に秘める人間以外のモノらしく生命の暖かさなどないように感じる。

「……わかったわ」

数秒間の睨みあいの後、そう呟いてさやかから放れた。悠のいた頃は感じなかった彼女の狂気にも似た感情が周囲の空気を替えるようだった。時雨に関するレポートも彼女の目には入っている。目覚めたのは半年前、その時現場に居合わせた長瀬悠の両足を彼女は破壊した。

時雨が橘さやかを消し去る事は造作もない事。気に入らないと判断すればすぐに命を絶つだろう。時雨にとってみればさやかは所詮人間でしかない。極度の緊張は自ら遠ざかる。一人、茂みのなかへと入っていく。

「遠くには行かないでくださいね」

無言で進んでいく。

「きつとあの子には私のことなんてみえていないのね」

肩の力を抜いて車へと戻る。ハンドル越しに時雨の身体は見えている。彼女が長瀬悠の非になるようなことはしないはず。警戒しながらパソコンの電源をつける。同時に洞穴の中からギターの音が微かに聴こえた。心と山が震え試験が始まったことを告げた。

橘さやかのレポートもはじまっている。時雨とパソコンのモニターを行き来する視線。文字と緑と銀色の髪が彼女の全てになった。

認定を受けていない奏者による儀式はこれまで最短で二時間、最長四時間かかったこともある。長瀬悠の能力なら最短時間を更新する可能性さえあった。かの少年の能力は本部でも有名で他の奏者も気になる存在になっている。奏者の力の源は生態エネルギーともされる。音を奏する間、ひたすらに力を消耗するため長い時間は演奏できない。ただギターを弾くのは訳が違う。同じ演奏一時間でも力の消耗は倍以上。最長四時間行なった人物は休憩をはさみながらの演奏だった。さやかからしてみれば少年の身体が持つかどうかが一番の悩みであった。試験の合格を望む者は全員であり誰一人、落ちる事を期待してなどいないのだ。

認定は通過儀礼であり自分達の仲間として認められるかどうかの審判である。ここにはいない笹塚笙子も悠の合格を祈っている頃だった。彼女こそ、一番に願っている人物であるだろう。レポートの作成を急ぐさやかは笙子の事を思う。長瀬悠の保護者となった彼女とはもう長い付き合いになる。彼女の合格はさやかにとって初めての試験だったのだ。あの頃の事は良く憶えている。笹塚笙子の試験合格は自分のことのように思い出せる。

「久しぶりに面白い仕事ね」

いつの間にか一人呟いていた。保護者となったときも驚いたが今ではもう一人、時雨という厄介な者まで連れている。彼女の生き方は自分に真似できないほど興味深かった。視線を時雨に向けてそう思う。

彼女の行動に波があると本部でもよく噂になる。そして彼女を実の姉のように慕う織戸慧の試験の時もそうだった。個別に見ればプロフェッショナルな人物たちが集う。独立し一人でいることを望むような者達が彼女の下に集まっていく。自分の受け持った全ての魔術師よりも彼女はあらゆる面で秀でていた。

洞窟の中から聴こえる音色はただ優しく激しさは皆無だった。

今までの儀式では最初に大きな戦闘が行なわれる場合が多かった。最初、山が震えたのはそれと同じ事。土地神が力を爆発させて身体に溜まった穢れを排出するための儀式のような物だ。異常ではなくそれこそが本来の在り方でもある。奏者達はその暴走を自ら食い止めるのだ。

「そろそろ二時間ね」

パソコンの表示している時間で計っていた。一度大きく息を吸うと目に飛び込んできたのは時雨だった。今までぼうつと立ち尽くしていた時雨が駆けてくる。車内からその姿が見えてどうしたのかと彼女は外へ出た。

「なにしてるの！ まだ終わってないわよ」

試験の最中は何人たりとも進入禁止である。中にいる悠になにか起きたようにも思えない。静かだがギターの音は聴こえる。にも関わらず時雨は着ているコートと長い銀色の髪を揺らして洞穴へと入りそうになる。

「聴こえないの、今入ったら失格よ！」

がっしりと腕を掴む。足を止めてさやかを見る時雨。冷たく刺さるような氷の棘のようだった。さっきの彼女とは違っていた。身体の内芯から冷める。さやかは掴んだ手を放す。

「何が起きたの？ 解るなら教えて」

「悠の音色が変わったわ。解らないの？」

表情は変えなかった。さやかには音色の変化などわからなかった。時雨はつぎはぎでできた女。目覚める前からすでに人間ではない存在。その美しさもまた人外である。

音は突如として消える。二人の間に静寂が流れる。まさか、と時間を見るとまだ二時間経っていない。だが最短記録達成とは思えなかった。そこに足場が崩れるかというほどの地震が起きる。奏者の演奏中、このような事態に陥ったことはなかった。今は演奏していないがさやかがこれまで見てきた試験とは違った。もし何か起きた場合、試験官は立ち入りを許可できる。

時雨の顔はただ一緒にいたいという思いだけではない。瞳を見れば解る。

「私も行くわ」

「勝手にすればいい」

時雨が駆け出す。向う先はただ一つ。悠が歩いていった洞穴の奥だ。さやかは知っていた。洞穴の中がどうなっているのか。足元には水が流れ出す。この山には水脈がとおっている。気温は急激に下がり真冬のように身体を冷ましていく。まるで時雨の肌のように冷たくある。そんな冷たい洞穴が何所まで続くかも彼女は知っている。時雨はほとんど先へと進んでいく。もはや追いつけぬさやかは一人必死で駆けた。

第二章四話

洞穴を進んだ先にあつたのは水の流れる音と雫の垂れる静かな空洞。長瀬悠の瞳に写つたのは透き通るような青に染まつた岩山だった。天高くまで続いた長い煙突のような穴がついており壁の青とは違った空の青さが差し込んでいる。太陽の光がそこから入り込み水晶のような壁に命を吹き込むように輝かせていた。

「荒神様が……」

空洞には大きな5メートル四方に渡って作られている藁のベッドがある。悠の身長よりも高い位置に作られていたベッドには一匹の獣が寝そべっていた。全身が黒の毛に覆われ頭角に生えた二本の角は人一人分の大きさはあつた。また前足は野太い樹木のように太かつた。

「ほう、ぼうずが悠か？」

「そうだ」

巨大な獣は寝そべつたまま赤い瞳を悠へと向けた。人の言葉を話す。見上げるとそれ以上に上へ視線を向ける。獣の姿をした神はその身体を持ち上げたのだ。体重は何百ではなくトンではないかというほどに見えた。前足に較べると後ろ足は短く小さかった。尻すばみする体形であり尻尾は長かった。

「ならば、速く弾いてみせろ」

尻をずどんとベッドに落とす。背を壁に預けるようにして悠のほうへ瞳を動かす。悠も言われたとおりにギターを取り出してさっそうく弾き始める。試験がどのようにして行なわれるか、特に聴いてはいなかった。そういうものだと思っていたし聴く事もないと彼自身心で感じとっていた。

荒神様と呼ばれる巨体は空洞の中で発生したメロディーに身体を震わせた。歌うように叫んだ咆哮が山をも震わす。大気は震え大地は共鳴する。木に止まっていた鳥達は大小問わずに一斉に飛びたつ

た。鹿や猪も同じだ。山に住む全ての命が咆哮によって目を醒まして騒々しく身体を振るわせた。

その最初の咆哮から荒神様は動く事はなかった。一切暴れずにただ悠の奏でた音楽に身を任せただ。身体の中で浄化された穢れは水流に乗って流れていく。緑と青の粒子が解き放たれていく。

悠の力はこれまでの奏者よりも強く鳴響いていた。その音楽のなかで荒神様は天を見上げてときたま吼えるだけになった。吼えるといっても最初の咆哮とは違い山は震えなかった。ただ身体から消えていく穢れにこそばゆいだけだった。

奏者の力は長く続かない。連続で弾くなら三十分……いや一時間が限界だった。それは彼らの体力と精神力によっても左右される。だが長瀬悠は一時間半という長い時を経てもその指を止めなかった。それどころか曲はテンポを上げていつのまにか彼の好きな六供町へと変わっていた。弦の唸りにあわせて壁が反響する。たった五つの細い弦から放たれた光のような音は心を鎮めていった。

すでに荒神様の身体に溜まった穢れは残っていなかった。そこそここの山に微塵のような穢れさえ全て消えている。悠の力は強大であり獣の神も認めていた。だからこそ彼の弾くギターの音色に身体ごと心も預けていた。

奏者と土地神の間に亀裂が生じたのはその曲のフィナーレ。橘さやかとともに走ってきた無謀に切り開いた道よりもっと前、そこには高速道路がある。他にも一般道路が流れている。山は外と内とでは見えるものが違う。道路の傍では拡張工事が行なわれている。

ラスト直前、フィナーレの最中で荒神様は身体を動かした。

「どうしたんだよ」

悠も演奏を中断して見上げる。

「さやかめ……話が違うぞ」

これまでとは違う振動が壁を伝ってくる。その振動が義足にまで到達する。急な振動で弦から指が離れる。目の前にいた巨大な獣は穏やかだった表情を一変させ辺りを見る。蒼く光る壁ではない。そ

の先、太陽の下にある緑の大地に向けられている。荒神様にとってこの山は全て目が届く範囲だった。

洞窟の中には空から一本の光が落ちている。頂上付近にある穴を荒神様は見る。さっきまでの穏やかな時の流れは一瞬で消し飛んだ。獣はその巨大な体躯を奮わせる。身に溜まった穢れはない。自らの限りにけたたましく吼えた。

「まって！」

悠が叫んだ。神の行動を肌で感じ取っている。怒りだった。何者かに向けられた怒りに声は洞窟に響いた。

「小僧！ 約束が違うぞ！」

「約束ってなんだよ」

全身を覆う黒い毛を逆立てる。このままではここから飛び立つて行くことは間違いなかった。悠は再び演奏を始める。疲労していないはずはない。今も肩で息をするのがやつとだった。それでもあと僅かだった演奏を再び途中から始めるしかなかった。弦の唸りで光が出現する。

「それがお前の本気か？」

光を縄に見立てて荒神様を縛る。大木さえなぎ倒してしまいそうな腕も足も一気に抑える。突然にしてむくむくと大きくなっていく。「暴れないっていうなら解く。僕に理解できるように言ってくれ」

「それは無理だな」

人の身体ほどある筋肉は今にも光を引きちぎりそうになっている。解ければ力の向う先は悠しかなかった。少年の身体は対応できずに軽がると吹き飛ぶだろう。あの瀬戸内海で見せた黒の義足を履いていても変わらない。義足共々、粉々に粉碎される。

無理か、と思うも力の限り弾き続けた。だがやはり神の力は偉大である。悠の力は太刀打ちできない。そして音と一緒に光りは途切れた。

非情な暴力が少年を襲う。こぶしは身体と同じ大きさをしている。指先が触れるだけで骨は砕けるとおもうほどの強烈な一撃。目を逸

らずに立っていた。

第二章五話

「氷の華よ、護れ」

途端に女の声。マントのようにコートを翻し銀髪の女は両者の間に割って入った。右手を翳していた。掌の数ミリ手先で分厚い氷の華が咲いた。丸い棘のような氷が幾つも重なって咲かした華はこぶしから防いだ。

「……貴様」

白い息を吐いていた。

「時雨？ どうしたのさ。呼んでないよ」

「音を聴けば解るよ、だから来た。私が来なかったら潰れていたわ」
彼女にとって悠の存在は何物にも替えがたい。さやかを振り切り一人駆け出したのは間違いではなかった。間一髪、長瀬悠はこぶしから繰り出された風だけを受け怪我をしなかった。

「荒神様、これは？」

遅れてやってきたさやかが三者の状況に目を開く。彼女の経験でこのような出来事は滅多にない。とくに試験ではあり得ない状況だった。

「さやか、我との約束を忘れたか？」

「何を言って」

「何をだと……なら外で暴れている者どもはなんだ」

すぐにさやかが携帯電話を取り出した。このような場所でも連盟の通信機器は感度量衡で仕事をこなす。どこへ掛けているのか突如彼女は電話の相手に怒鳴った。動く事が出来なかった時雨と悠はそんな彼女を見ているだけだった。

「そうよ、解つたらすぐに止めさせて！ いいわね！」

携帯電話をしまうと彼女は荒神様の傍までやってきて頭を下げた。
「外の工事はすぐに止めさせるわ。こちらのミスよ、ごめんなさい」
荒神様だけではなかった。悠に対しても彼女は頭を下げた。

「どういうこと？」

「試験の際中は工事なんかは全部止める事が条件なの。命の流れをかえない為にね。荒神様が怒ったのは私たちの言う事を聴かずに工事をし始めた人たちがいたのよ。すぐ職員が向うわ」

「なら……よしとしよう。だが二度めはない。こういう事態になるのは好かんことは知っているな、さやか」

獣の神は姿に似合わず寛容だった。さやかが頷くとこぶしを大地に預ける。再びベッドへと進んで腰をおろす。怒りは収まっているのか息は荒かったがさっきまでの豪腕は細く凝縮していた。その光景に時雨も掌から咲かせた氷の華を砕いて消し去る。華は彼女が必要とした分だけ咲いたのだった。

「それとお前」

時雨を指さす。先ほどの氷はすでに消えていた。確かに全てを粉碎する一撃だった。その攻撃を防いだ時雨は何食わぬ顔で立っている。

「人ではないな？」

「お前に関係ない」

彼女にとって相手が誰かなど関係なかった。

「貴様のような者がなぜいる。さやか今日はなんだ？」

「彼女は……」

「僕のボディガードだ」

悠が言った。全員の目が彼へと向った。

「ぼつずの音は最高だった。しかしな……」

「試験に問題でもあるの？」

「いや、ない。我は貴様らの試験など興味はない。そっちの人外よ、貴様からは複数の人間の匂いがするぞ」

「それは私の身体がつぎはぎだからよ。まっとうな人間の身体じゃないさ。皮膚だって、骨だって最初はばらばら、私は誰の子供なのかどうやって生まれたのかも知らない。でもね、これだけは断言できる私は悠のモノよ」

悠にそつと抱きつく。悠も動じずに好きにさせている。荒神様の赤い瞳は時雨ではなく悠を見ていた。それも外見ではなく内側に秘めた力を。

「ふん。つぎはぎか人間はつくづく実験が好きだからな。ぼうず、お前はどう思っているんだ」

「どうもこうもないさ。時雨は僕のボディガードだ」

やはり神の瞳は少年を見ている。時雨の姿は写っていなかった。悠の内側に蒼い光を見ていた。だからこそ、その隣りで寄り添う女から目を逸らそうとした。

「ぼうず、こつちへこい」

呼ばれて悠が近づく。とてつもなく大きな手が動く。さつき少年を粉碎しかけた手だった。指一本でも少年より太く見える。その大きな掌を悠の頭に置いた。不安はなく畏れも抱かなかった。ただ、やんわりとした浮遊感に包まれる。

「少し力を引き出してやろう。お前には役に立つだろう」

土地神はそう言って悠の頭に置いた掌を退けた。それを見ていた二人には何が起きたのかわからなかった。当の本人も何がどうなったか解らないままだった。力といっても筋肉が付いたわけではない。外見上何も変化は見られなかった。

「さやか、儀式……お前達が言うところの試験は終了だ。我の身体もすつきりした」

頭を下げるさやか。解放された悠に時雨がべったりとくつつく。するとさやかの携帯電話が鳴った。外で起きた突然の工事ことを伝える連絡だった。彼女は現場監督らしき人物に変わってもらうと叱責して電源を切った。

「今回のような事は二度とさせません。悠君にも、申しわけなかったわ」

改めて頭を下げる。荒神様は再び寝そべり三人がいる事に気も向けず寝息を立てはじめた。まるで姿そのものの獣のようだった。

「悠君、時雨さん出ましよう」

「いいの？」

「言ったでしょ。荒神様は終わったって」

これまで幾多の試験をこなしてきた彼女は今回のことには妙なことが多すぎると考えていた。車まで戻ろうと洞穴を歩き始めたが後ろを着いてくる二人を見ることはない。試験の間は山で工事など一切行なわない。それは初歩的な事務で決してミスなどするはずはない。過去数十年に対して試験の際に起きた事件は三件にも満たない。加えて試験官一人が山で同行しているわけでもない。彼らの見えない場所に数人配置された魔術師もいる。彼らに不備はなかったはず。何より橘さやか自身がそんなミスを犯したのは初めてだった。

荒神様こと土地神は怒ったが暴走するまでに到らなかった。身にあつた穢れが浄化されていたとしても沸点の低い荒神様であれば少年との戦闘は避けられなかっただろう。なぜか時雨の介入でそれはなかった。

陽の光が彼女の視界と思考を遮った。太陽は頂点へと昇っていた。見上げると眩しい青の景色が広がっている。深呼吸して息を整える。後方から追いついた二人が入り口を塞がるように立っているさやかに足を止めた。

「なにしてるんですか？」

突然、パンと両手で頬を叩く。赤くなる頬だったが彼女は気をしつかりと持つため必要だった。こんなことでどうする。これから長瀬悠の報告をしなければならぬ。友人のため、連盟のため……何より長瀬悠という少年のため。

「これで試験終了です。結果は本殿でお話します。悠くん試験お疲れ様」

笑顔で言つて二人を見た。見た目以上に疲れている悠はギターを時雨に預けていた。

さやかの目には二人は常に共にあった。

第二章六話

空は青く雲の数も少ない。風はゆったりとした流れを作り出して山の香りを運んでくる。4WDの中型車を囲むように三人はいる。トランクケースには車内ぎりぎりの大きなクーラーボックスが入っている。中には人が入れそうなそのケースにはこれまたぎゅちりと本や機材が詰め込まれていた。

「さやかさんはあの神様と知り合いなの？」

荷物の詰め込みをしているさやかに悠が聞いた。それがとても珍しい事だとさやかは気付かなかった。長瀬悠がこれまで自分の側から声をかけることはほとんどなかった。ただ、荒神様との関係が気になったのだろうかという程度だった。

「私の家はね荒神様との交流によって支えられてるの。連盟の試験官は何も私だけじゃない、父さんもお爺さんもそのまた上も……ずっと試験官を務めてきたわ」

「長いんだね」

「神といっても宗教や見えない想像上の神じゃないわ。ちゃんと姿も見える。子供の頃、初めて会ったのはまだ五歳くらいだったわ。びっくりして泣いてたって父さんにまだ笑われてる」

仕方ないことだ。荒神様は大きな獣の姿をしている。話しが本当なら五歳の少女が耐えられるものではない。泣き出しても不思議ではない。悠はそのことに何も言わなかった。

「でもびっくりよ。彼が人の事を誉めるのは初めてだったもの。合格のお墨付きといったところね」

「試験なんだけど、さやかさんは洞窟の外にいたよね。どうやって判断するの？」

「判断を下すのは私じゃないわ。本殿で待っている人たちがいるの。彼らが判断するわ。私は報告するだけ」

「そっか」

最後の荷物を積んで三人は車へと乗り込む。助手席に座らずに後部座席へ乗る悠と時雨。助手席には多くの機材を乗せていた。それを避けたにすぎなかった。

「でもよかったわ。あの時、時雨さんが入らなかったらどうなっていたか」

走り出した車で彼女は言った。狭い道をがりがり言わせて下っていく。密着する時雨の身体も悠へぎゅっとぶつかっている。

「悠に手は出させないさ」

「だからってこっちも手を出しちゃ駄目だ」

悠は瞼を閉じていた。力を使い切っていた。いつもとは逆に時雨に向って体重をかけていた。悠の言葉はまるで寝言のように聞こえた。

「私の悠は特別な。あの程度の神なら清めるだけじゃなくて完全に浄化だってできるわ」

時雨の髪が少年の頬をくすぐる。自慢するような言葉だったが悠は否定する事はなかった。ただ面倒だったから声を出さなかった。

「浄化だなんて物騒なことは言わないで。それに土地神を浄化できたとしたら間違いなくリストに載るわ。日本にいらなくなる」

「時雨、冗談はよして」

悠に言われると頷いた。さやかの目には長瀬悠という少年によって飼われているように見えた。時雨は連盟から特別に認められているにすぎない。すでにリストに載っている手配中の魔術師が残した遺産でもある。その攻撃的な正確は橘鞘かも知っている。レポートに記載されている。

「私は悠を護っただけよ」

「わかってるわ。あなたの判断は間違ってない」

あの時、時雨が音の変化に気付かなかったら一人の奏者を亡くしていた。口に出さなかったが時雨には感謝していた。彼女は長瀬悠を護ったのと同時に土地神の存在までも護ったのだ。彼女も力の限り戦えば荒神様といえ無傷ですまなかっただろう。

土地神の消失は土地の死亡を招く。生態系は崩れ、土は腐る。木々は倒れ生きる生物の魂はその場に残るのだ。すでにそうになってしまった土地は日本だけにとどまらず全世界で起きている。人間の生活にも関わってくる大事な事だ。魔術師たちの力にも影響を及ぼしてくる。だから土地神を守ることは彼等が生きていくために必要な仕事である。

車は立ち入り禁止の看板を前にして一旦とまる。さやかは来た時と同じようにして看板を避ける。向かいに見える道路には車は走っていないかった。山にしては珍しいストレートの道でカーブの辺りにはミラーがあった。これは人目を避けるためである。

車を動かし再び看板で道を塞ぐ。山を流れるように車を滑らして進んでいく。その途中、例の工事現場が見えた。誰一人いなかった。彼女の命令を実行した連盟の職員によって工事は行なわれないだろう。だがさやかは何たることかと息を飲んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5091y/>

幻想組曲

2011年11月29日12時54分発行